
魔法少女まどか マギカ ~眠り姫の存在証明~

icsbreakers

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ ～眠り姫の存在証明～

【Zコード】

Z5786X

【作者名】

icssbreakers

【あらすじ】

鹿目まどかはある日突然、三日後に死んでしまうと死亡予告を受け
る。

裏切り、仲間割れ、救い無きものたちの悲鳴。
壮絶な三日間の先に待つまどかの運命は……。
そしてこの三日を見つめるある少女の存在理由とは?

一日目？（前書き）

同作者が書いている作品の続きとなるものです。ですので前の作品を読んでいただけたと登場人物、舞台背景などなどわかりやすいかと思います。

鹿田まどかはいつの間にか見知らぬ場所に迷い込んでいた。

不安げな表情を浮かべて立ち止まり、ただ呆然と周りを見渡すことしか出来なかつた。

「どうして……」

思わずそのまま口から漏れた。

無理も無いことだつた。

なにせまどかはいつもと同じ通学路を通りて帰宅する途中だつたのだから。

三年も通つた道を間違えるはずなど無いし、ましてやまどかの見知らぬ場所などこの辺りには無かつたはずだつた。

まどかは無闇やたらに動くのは良くないとわかつてはいたが、今いるトンネルの中が異様に不気味で怖かつた。

そのためとりあえずここから出たいと思い、早足でトンネルを抜けた。

トンネルの先はなぜか噴水広場だつた。

車も通れるほどの大ささのトンネルの先が噴水広場という世界構成の滅茶苦茶なこの空間の正体に対し、まどかはある一つの答えを

導き玉をつとじてこた。

「「」れつて魔女結界……」

当然魔法少女でないまどかに魔女の気配を感じ取る「」とは出来ない。

そのためいつの間にか迷い込んでいた なんていふとは普通に
ありえる。

「「」は魔女結界ではあつませんよ」

「……」

背後から聞こえた声にまどかは声無き悲鳴をあげた。

「驚かしてしまい、申し訳あつません」

声の主は初老の男性だった。

服装を見る限りではお座敷の執事という感じだつた。

「わたくしはクロードと申します。とあるお座敷に住まい主に仕えております」

クロードは手を胸に当てて一礼した。

「失礼ながら……あなた様のお前は鹿田まどか様でよひしかつた
でしょうか?」

まどかはとても場違いなクロードの存在に困惑しながらも、首を縦に振つてその質問に答えた。

「そうですか。人違いでなくて良かつた」

クロードは笑顔でそう言った。

「あの…………」

「ああ、ここですか? ここは結界の中です」

まどかは前に出合つた叶ゆかりのことを思い出した。

ゆかりも自身の魔法で結界を作り、その中で行動していた。

それと同じ類のものなのだろうか。

「あなたと一人だけでお話がしたいと思いまして。『迷惑かとは思いましたがここに呼ばせていただきました』

「私と…………?」

クロードは頷いた。

そして懐から砂時計を取り出した。

取り出された砂時計は既に砂が落ちており、幾分かの時を刻んでいることがわかつた。

「ここの砂時計はちょうど一日の時を刻めるように設定されておりま

す。見ての通りすでにその二回の時は始まつておつます。

クロードは砂時計を手から離した。

砂時計は落しかねじなく宙に浮いていた。

「何の時かと言つますと……」

クロードは笑顔のまま、まどかを見つめた。

「まどか様、あなたの命が終わるまでの時間でござります

まどかは何を言われたのかまったく理解できなかつた。

「え……？」

命が無くなる？

つまり死ぬといふことか？

「突然このよつなことを言われてもピンときませんよね。もう少し詳しく述べますと、わたくしがあなた様を契約させ、その力を奪うのがちよつと後」といふことです」

「契約？力を奪う？」

そう言われてもやはりわからなかつた。

クロードの目的がまるで見えてこないのだ。

ただかつて蒼井彰あおいあきらが欲したように、まじかの秘めた才能は必要な者からすれば喉から手が出るほど欲しい力ということは理解している。

「わたくしはあらゆる手を使つてこの三日後、あなた様を契約に導きます。ですからまじか様……残りの時間を大切に過ごされるようお願いします」

クロードは再び一礼をした。

そしてクロード共々、空間がぐるりゅうとゆがみ始めた。

「ちょっと待つて……」

まじかが呼び止める声も空しく、空間は消え去り、いつも見ている景色へと帰った。

「そんな……私、どうしたの？」

『『残りの時間を大切に』』

クロードはまじかに言つた。

だが胸の中に漂つ不安はそんなことを考える余裕など『『えてくれそつに無かつた。

放課後。

巴[巴アリ]は血鬼が通う見泷原高校の2年生の教室の前にいた。

「お待たせ、巴さん」

「いえ、いろいろ時間を作つて貰つちやつて……。ありがとうございます」

巴[巴アリ]は、高科先輩

たかしな
高科はマリの一つ上の先輩で、中学生の頃から少しだが交流があつた。

「それで聞きたい」とつて何?」

「あの……蒼井先輩のことなんですね」

「蒼井? もしかして蒼井彰?」

高科がそう聞き返すとマリはそれに對し頷いた。

ワルブルギスの夜のあとに起きた大きな出来事と言えば蒼井彰の事
件だ。
あおーあー
おーあー

もしこれから何か起きるのだとすれば、あの事件も無関係ではないかも知れない。

そう考えたマリは発端とも言える蒼井彰のことを少し調べておこう。

と思つたのだ。

「ははーん」

高科はそんなマリの考えとは裏腹に思わぬことを考へてゐるようだつた。

そしてその内容は高科の表情から簡単に読み取れた。

「あの……別に特別な感情とかないですから」

マリは一応そう弁明した。

「まあまあ。蒼井くんは成績優秀、スポーツ万能、しかも中タイケメンで誰隔てなく優しい完璧超人だからねえ。ライバル多いよー」

まるで高科はマリの弁明を聞き入れていなかつた。

「でも蒼井くんは極度のシスコンだからね。彼女作る気なんて無いと思つし……それに今行方不明だしね」

「行方不明……」

その最後を見たのは後輩の鹿田まどかだけだ。
かなめ

生きているのか死んでいるのか、それすらわからない。

そのため学校のほうでも行方不明として噂が広まつていた。

「噂によれば妹さんと一緒に居なくなつたとか。無理心中とかして

なきやいいけゞ」

「そんなに思いつめていたんですか？」

「よく何か考へてるようだつたけど。夢中でやつてた剣道をやめた
くらいだから結構思いつめてたんじゃないかな」

「剣道やつてたんですか？」

初耳だつた。

確かに一度戦つた時は少し戦い慣れている そんな風には思つ
ていた。

「せうよ。つてか巴さん知らないの？蒼井くんつて言えば神童つて
言われるくらい剣道がうまくて、中学校じゅうは大会に出たら必ず優
勝してたんだから」

「やうだつたんですか？」

彰もマミと同じ見滝原中の元生徒だ。

それだけの記録を残していたといつに全然知らなかつた。

（私も魔法少女として戦つてばかりであまり周りが見えてなかつた
ものね……）

戦つてばかりの中学時代を思い出し、マミは渴いた笑いを浮かべた。

「もし蒼井くんの」と、もう少し知りたいなら剣道部行ってみたら

？」

「ナリですね。そうします」

マリはお礼を言つて頭をさげた。

「頑張つてね、田代さん！」

そして別れ際になぜかエールを送られた。

マリは恐る恐る剣道部の活動している道場の入り口をまたいだ。

「あ、マリさんじゃない！」

「中沢さん？」

同じクラスの女子だった。

「剣道部のマネージャーしてたのね。良かつたわ、知り合いかいで

……

「どうしたの？もしかしてマネージャー希望ーー？」

中沢の問いかけてマリは苦笑いを浮かべて首を横に振った。

「うふと聞きたい」とがつて

「

マリちゃんにかけたところでふと視線を活動中の男子に向かた。

「……」

もの凄く見られていた。

「氣をつかひマリさん。」ニコニコケダモノだから

耳元で中沢がわざやいた。

「ケダモノって……」

「剣道一筋で女っ氣に飢えてるのよ。マリさんみたいな美人、滅多に押めないから……」

確かに只ならぬ力を感じた。

マリは心の中で早くここから逃げようと決意した。

「あのね、蒼井先輩のこと聞きたこの

「えー? もしかしてマリさんも蒼井先輩のこと……?」

「違うわよ。って、も?」

マリがそう突っ込むと中沢は顔を赤くした。

「ち、違うんだね。先輩のことなら鈴木先輩に聞くのがいいよ。」

中沢はそう言つと鈴木に声をかけ、連れて来てくれた。

「彰のこと聞きたいって？」

「は、はい。ちょっと知り合いで、蒼井先輩のこと気になつていて、それで蒼井先輩のこともつと知りたいって頼まれちゃつて……」

とりあえずそう取り繕つた。

鈴木は特に疑つとも無く「やつなんだ」と返した。

「彰とは中学入つてからずっと剣道しててさ。まあ、あいつ強すぎたから俺じゃ全然練習相手にならなかつたんだけど……」

鈴木は悔しがる様子も無く、笑つて答えた。

「あいつもともとは剣道じやなくて居合いをやつてたらしんだよね」

「居合い？」

「鞘に刀を納めた状態から切る技のことだよ。小学生の間は見滝原とは別のところに居たみたいで、確か鏡音道場だったかな？そこで長い間居合いをやってたんだって。んで、こっちに越してからは居合い道場なんて無いから、代わりに剣道始めたらしいんだ」

この街にきてから彰の人生は変わつたといえる。

もしこの街に来なければ今も幸せに暮らしていたのかも知れない。

そう思つと何だか寂しい気持ちになつた。

「居合いをやつてた頃のあいつは知らないけどさ。剣道やつてる時
のあいつは輝いてた。嫉妬するくらいさ……。あんなに夢中だつた
のにその剣道もやめて、ましてや行方不明なんて

「

鈴木は表情を暗くした。

付き合いが長いため、色々思い出すこともあるのだろう。

「まああいつには明奈ちゃんつていう妹がいたからな。明奈ちゃん
は身体が弱いみたいで、ほとんど寝たきりだつたんだけど、どうも
余命宣告を受けてたらしい。あいつそれですつごい悩んでなあ。
行方不明になつた原因もそれなのかな……」

まどかから妹を救うために契約したらしいといつとは聞いた。

ここに来るまで何人かの人に彰の話を聞いたが、必ず出てくるのは
妹想いの兄の姿だった。

それほどまでに大事にしていた妹が死ぬかもしれないとわかつたら、
悪魔に魂を売つてでも救いたいと願うだらう。

マリはそれからも少し鈴木から話を聞くと、道場を後にした。

特に重大なことはわからなかつた。

ただわかつたのは、彰は自分達が思つていたものとは違つていたと
いうことだった。

彰を心配する友達もいる。

慕つものもいる。

そして何より妹想いなその姿は彰の人間性を如実に現している。

「きっと彼は道を踏み外してしまつただけだったのね」

マリはとうとう帰る

そう思った時だった。

「！」

ソウルジエムが淡く光った。

（魔女？この近くに？）

マリはソウルジエムが知らせる魔女の気配を追つてその場を後にした。

魔女の気配を辿つて到着したのはマリが通う高校の東側に位置する校舎の裏側だった。

放課後といつともあり人気はない。

マリは既に魔法少女姿に変身しておつ、いつでも戦える状況にあつた。

だが……。

「」「これって魔女なの!?」

田の前にいる異形の存在にマリはたじろいでしまった。

マリの前にいるのは全身真っ白でロープに身を包んだ長身の人物の化け物だった。

ソウルジムは確かに反応しているが、どうも魔女と感じできない。

魔女結界を展開させる様子もないし、魔女にしてはソウルジムが感じ取る魔力の量も少ない。

どちらかといえば使い魔に近い存在なのだろうか。

だが直感的にこれは使い魔ではないと思つた。

(あきらかに実体を持つてゐる……)

魔女や使い魔は普通の人間には見えない。

だがこことは実体持つており、誰にでも視認できる。

だとすれば何者なのか？

(可能性があるとすれば別の魔法少女の能力……)

化け物がようやくマリの存在に気が付いたようで雄たけびをあげた。

そして化け物は口に何か力を溜め始めた。

「……？」

マリはとつとて口にジャンプした。

化け物の口から吐き出された光線はマリのいた場所を抉り取った。

「なんて攻撃…………。アニメに出てくる幽獣じゃないんだから

「そう愚痴りながらマリは伸縮自在なりボンを化け物に向かって伸ばした。

リボンは化け物に絡みつき、化け物の動きを封じた。

「敵意があるとわかつたなら容赦しないわよ

マリの背後に無数のマスケット銃が出現した。

「悪いけど、決めさせて貰うわー！」

マスケット銃が一斉に火を噴いた。

放たれた弾丸は身動きの取れない化け物に容赦なく被弾し、化け物を言葉通り蜂の巣にした。

マリはアーメの一撃を入れようと必殺技『テイロ・フィナーレ』の準備態勢に入った。

だが化け物の口には再び力が溜められていた。

もう動けるはずがない そう囁いていたマリは完全に不意を衝かれてしまっていた。

（今ままじや無傷で避けるのは……！）

諦めかけたそのときだった。

突然化け物の頭が吹き飛んだ。

そして化け物は溶ける様にして跡形も無く消えた。

「油断大敵ね……マリ！」

「あ、暁美さん！！」

マリの前に降り立つたのはショットガンを手に持つた暁美あけみほむら だった。

「近くでヤツの気配を感じて来てみたらあなたが戦っていたから……。とりあえず無事でよかつたわ」

ほむらはそう言つて微笑んだ。

「ありがとう……。でも一体あれは？」

マミはぼむらの横を抜け、化け物が居た場所に歩を進めた。

魔女でも使い魔でもないわよね？」

「それでは、おそれなく私たちの知らない魔法少女によるものね。」

キュウベえが契約すればした数だけ魔法少女は増える。

当然そうすればマニアたちの知らない魔法少女だつているのだ。

「だとすれば、ずいぶんひねくれた子なのね……」

マリエ姫は、うつむいて、涙を垂らした。

「え？」

意外にもほむらがそれに反応した。

「だつてわうじょなー?」「んな危ないものを野放してしてるんだ
もの」

「……」

「ほむりは確定するわけでもなければ、ほむりはマジでマジを
見つめた。

「暁美さんがこんなこと気にかけるなんて珍しいわね。何か心当た
りでもあるの?」

「マジがそう言つて終わったときは先ほじまで田の前に面たはずの
ほむりが居なくなつっていた。

「あけ
」

突然強い衝撃が頭を貫いた。

視界が歪み、意識が遠のいていく。

「あなたには関係のなことよ

ふとそうほむりの声が聞こえた。

マジは最後の力を振り絞つてほむりを見た。

ほむりの手にはハンドガンが握られていた。

マジはハンドガンのグリップで殴られたといつもそこそくへ行き着
いた。

「な……んで?」

「まむぎは向むかひも答へなかつた。」

「マハナハナのアキラケと答へなかつた。」

(今日もほむらちやんはお休み……。何かあったのかな)

鹿目まどかは座る者のいない席を自席から見た。

昨日も暁美あけみほむらは学校に来なかつた。

まどかからほむりに電話してみたのだが、ほむらはでなかつた。
まどかは休み時間になると友人の美樹みきさやかと人気のない場所に
移つた。

「ほむらのやつどうしたのかなあ」

さやかがそう言つとまどかは視線を落とした。

「今朝も一応メールしてみたんだけどまだ返事ないし……。何か危
険な目にあつたりしてないかな?」

「ほむらに限つて魔女にやられるなんてことないだろ?けど……。
まどかからの連絡を無視してるとてのが気にかかるのよね」

ほむらが人一倍まどかを思つていることは知つている。

だからこそまどかからの連絡に対し、何の返事もしないことにさ
やかも違和感を感じていた。

「放課後、ほむらの家に行つてみようか?」

「うそ……」

さやかの提案にまどかは頷いた。

そして休み時間が終わりに近づいていたことに気がついたさやかに促され、まどかは自分の教室に向かった。

教室に戻る間、まどかはクローディアに叫われたことを思い出した。

『あらゆる手段を使って

（それって頭を巻き込んでつけて……。だとしてもむづがち
やんも）

最悪の状況が頭に浮かんだ。

まどかは首を振つてそれをかき消した。

今日は文化祭が近いこともあり、授業が早めに切り上げられる。

準備の参加自体は個人の自由であり、支障がなければ帰宅しても良いことになつていて、

クラスの者に用事があるからと断れば早めに学校をでることも可能だ。

（早くもむづがちの無事を確認したい……）

さわめく心を押さえつけながらまどかはその日の授業をこなして

いつた。

* * * * *

放課後、まどかとさやかの一人はほむらの自宅の前に来ていた。

セセカが一度ほどチャイムを鳴らしたが、いつの間にか出でて来る様子は無かつた。

「やつぱいなんか……。なんか人気もないしね」

さやかはため息をついた。

まどかは淡い期待も届かず、ほむらに会えなかつたことに気を落とした。

「だ、大丈夫だつて。ほむらにだつて色々あるんだよ、きつとせー。
落ち込むまどかに慌ててさやかはフォローを入れた。

まどかは力なく頷くだけであまり効果は無いようだった。

さやかは頭を搔いて「うーん」と唸つた。

「うなつたら手当たり次第探すかあ」

「え？」

さやかは自分のソウルジエムを取り出した。

「魔法少女なら魔法少女を追えるんじゃないかな？あとは前でマリさん
さんがしたみたいにキュウベえを使って探してもいいし」

「そっか…それなら探せるかも」

まじかはさやかの考えに目を輝かせた。

そんなまじかを見てさやかは内心ホッとした。

「じゃあマリさんと杏子にも声かけて探してみるよ。まじかはまむ
らから連絡あるかもしないから、家で待つて」

まじかはさやかに言われて素直に「うん」と言えなかつた。

もしもむりがクロードに何かされて居なくなつたのだとすれば、
それは同じ仲間であるマリたちにも及ぶ可能性がある。

そう考えると、そのまま行かせてしまつのは自殺行為のよつな気
がしてならなかつた。

(やつぱつ話したまうが……)

まだほむりのじがクロードの仕業と決まつたわけではない。

今の状態でクロードに言われたことを話せば、余計な心配をかけ
させてしまつ。

そうすれば間違いなくまた傷つくる人が出てきてしまつだらう。

かと言つて、被害が出てからでは遅いのも事実だ。

「マリヤさん、電話出ないなあー。普通に考えたひ授業中か……。といつあえず杏子と探しに行つてみるよ」

「わ、わやかわやさんー。」

「ん?」

「えつと、やの……」

まどかは胸の前で手をモジモジしながら言ひぐせ言葉を捲した。

「大丈夫だつて。あたしと杏子がやられるわけないじやん」

わやかはまどかが自分達を心配しているのだひつ
わやかはまどかが自分達を心配しているのだひつ
て明るく返した。

「ま、だから大船に乗つたつもつて、このわやかわやさんの帰りを待
つててくださいな」

わやかは魔法少女に変身すると風の葉を剥けて行つた。

「わやかわやん……」

結局何も言ひ出せなかつたことに胸が痛んだ。

(「さなびつあつかずの氣持ちじや、また顎を傷つけやつよ……」)

まどかは携帯の画面を確認した。

せまじめむりからりの連絡はない。

まじかはため息をついてとつあねずむかに書かれたとおり書かれて
で連絡を待つことにした。

鹿田まどかが暁美ほむらの自宅から離れていく姿を少し離れたマ
ンションの屋上から蒼井彰は見ていた。

(まどかちゃん……。心配だらつた)

まどかとほむらの絆の深さは実際に見てよく知っている。

だから今のまどかの心境がなんとなく彰にもわかった。

彰はまどかのあとをずっと追っていた。

以前に出会った【概念】の口ぶりから、まどかを狙っている可能
性は高い。

そう考えていた矢先、得たいの知れない化け物がこの街を徘徊す
るようになつた。

これらもすべてまどかに向けられたものだとするならば、まどか
を追つていけばその原因にたどり着くことが出来るかもしれない。

同時にまどかを守ることも出来る。

やつ思つていいがでやつてきたのだが、まさかほむらが行方不明
になつてころとは思いもしなかつた。

彰はほむらに対して償いきれない過ちを犯している。

故にまどかと同等にほむらのこども気にかけていた。

「なあ、千里」

「呼びましたー？」

彰の自称弟子である綾女千里は、ポテトチップスを咥えたまま彰に振り向いた。

「千里の魔法でほむらちやんを探せないかな?」

「そりやー探せますけど……。あの人感じ悪いんぢーは嫌いだな
あー」

「マスターが頼んでいるんです。やつてあげたりどうですか？あ、上がりです」

「あー！ちーが見てない間にすり替えたでしょ！」

千里はトランプを地面に叩きつけて同じく自称弟子の櫛咲双樹に詰め寄った。

「そんなことアタジやあるまいし……」「

「死んでいい！」

緊張感の無い二人に彰はため息をついた。

「なあ、一人とも……。一応弟子つて自称してゐるくらいなんだから、俺に強力してくれよ」

「しないなんて言つてないじゃないですかー。ちーは大好きなししょーのために何でもやつちやいますよ」

千里の言葉に双樹も頷いて同意した。

千里は残りのポテトチップスを口の中に注ぎ込むと、衣服に付いた「ミミ」をはたいて立ち上がった。

「ちーてー今田もギョロロちやん頬むよー」

千里は先端に大きな田玉の付いた見た目グロテスクな杖を出現させた。

ギョロロちやんといつねのとおり、先端についた田玉はギョロギョロと忙しく動いていた。

千里は杖を自分の少し前方の地面に立て、手を離した。

杖は魔法の力で倒れることなくその場に固定された。

先端の田玉からオレンジ色のレーザーのような光線が放たれると、光線は物凄いスピードで何かを描き始め、それはやがて地図となつた。

そして地図上に白い点が浮かび上がり、その点はゆっくりと動き出した。

」のようにしてGPS端末のよつて、千里が一度見た人物を追跡することができる。

これが彰が千里眼と呼ぶ千里の魔法である。

「どうやらほむらつて人はここにいるみたいだね」

「そんなに遠くないな。行つて見よう」

彰がそう言つと千里はギョロちゃんを消して、「はーい」とやはり緊張感の無い声で返事した。

対して双樹は黙つて頷いた。

彰は一人の同意を取ると目的の場所へと向かつた。

美樹さやかは鹿田まどかと別れたあと、佐倉杏子とキュウベえと合流した。

合流したさやかは杏子に曉美ほむらの行方がわからなくなつたこと

を話した。

「ほむらもか?」

「も?」

杏子の意外な返事にさやかは間の抜けた返事を返した。

「マリのやつも昨日から連絡がつかないんだよ。それでアタシもこいつに聞いてみよつかと思つてさ」

杏子は表情一つ変えずにたたずむキュウベえを横田で見て言つた。

「ほむらとの連絡がつかなくなつたのも昨日……。なんかやっぱくな

い?」

「……だな。こりゃただ事じじゃないかもな」

田マリもほむらも簡単にやられぬよつな相手ではない。

それを充分知つているからこりゃ、杏子は内心不安を感じていた。

「キュウベえの話によると一人とも生きてはこりゃこい

「じゃあ捕まつてやるやつー」と。

さやかが杏子に向かつてそつと代わつてキュウベえが答えた。

「ほむらに關しては居場所はわかつてゐるんだ。マリはソウルジエムの氣配自体は感じるんだけど、なぜか場所がわからないんだ」

「それつてほむらは無事つてことなんだよね？」

さやかはキュウベえと杏子を交互に見た。

杏子はお手上げのポーズをして、キュウベえは首をかしげた。

「わからんねー。でもまあ、ほむらに聞けば何かわかるかもな

「さうだね。今ある手がかりといえばほむらしか居ない。杏子の考えに、ボクは賛成だね」

さやかも頷いて杏子に同意した。

「ほむらの居場所ならわかるよ。つこづきてー。」

キュウベえが先頭を切つて走り出す。

一人はそのあとを追つていった。

さやかたちがほむらの元にたどり着いたとき、ほむらは戦闘中だつた。

白いロープに身を包んだ長身の大型の化け物が一体。

黒いロープに身を包んだのが一体。

計三体の化け物がほむらを襲っていた。

「杏子!..」

「わかつてゐよ!..」

杏子は自身の分身を一人作り出し、白い化け物に一斉攻撃を仕掛けた。

そしてそれとほぼ同時に、さやかはもう一体の白い化け物に切りかかった。

「ほむら!..大丈夫か!..?」

杏子がほむらにそう声をかけると、一瞬驚いた表情を浮かべ、しかしすぐに真剣な眼差しに戻ると小さく頷いた。

「よし!..じゃあ、わざと片付けまおーぜ!..」

杏子は分身たちとの総攻撃で化け物の四肢を破壊した。

「杏子!..そいつの額についている石を破壊して!..でないとまた復活するわ!..」

「わかつた！」

ほむらの助言に杏子は間髪いれずに行動した。

分身で化け物をかく乱させ、隙が出来た額に杏子は狙いを定めた。

そして勢いをつけ、そのまま槍で化け物の額を貫いた。

化け物は額を貫かれた瞬間ドロドロに溶け、そして消滅した。

「いっちょあがり！」

杏子は一人の手助けをしようと一人の様子を伺つた。

『おおおおー。』

ちゅうどいやかがもう一体の白い化け物の額の石を砕き、倒したところだつた。

「やるじやん」

「なめて貰つちや困るわよ！ なんてね」

さやかと杏子は田配せして笑みを浮かべた。

そして一人はすぐ「ほむらのほうに加勢した。

「ほかの一体は雑魚よ。」いつが中ボスつてところかしら」

黒い化け物は向かつてぐることも無く、三人を見下ろしていた。

「！」じつは白い奴と基本的な行動パターンは同じだけど、力やスピード、知性が数段上よ」

ほむらの解説を聞き終わると、杏子はニヤリと笑みを浮かべた。

「上等だ。どっちが格上か思い知らせてやるつじやん」

ほむらと杏子は杏子の言葉に頷いた。

「こぐれー。」

杏子が飛び掛った。

一人もそれに続くよつて空へと飛び上がった。

黒い化け物は飛び掛ってきた杏子^{あんこ}に反応し、拳を振り上げてきた。

杏子はそれを難なく避け、横田でほむらとさやかの様子を伺つた。
敵を倒すことだけを考えるなら、ほむらが時間停止をして爆弾あたりで一気に決めるのが手っ取り早い。

だがこの敵はどうも魔女や使い魔といった類ではないようで、実体を持つているのだ。

そのため現在繰り広げているこの戦闘も、結界の中を行われているわけではない。

結果内であれば人に見られる心配も、危害が加わる心配もない。

だが現実世界で戦闘をしている以上、爆弾や銃を使つたりするのは周りの被害や音からも警察沙汰になりかねない。

ほむらが今まで攻撃に転じられないのはそれも関係しているのだ
うう。

（あとは何か危険性がないかどうかも探つてるのかもな）

時間停止しさえすれば爆弾は使えなくとも、弱点を一点集中で狙い撃ちすることも可能なはずだ。

それをしないのはわざと倒した一体とはレベルが違うと言つたよ

うに、何か特別な力などを秘めていた場合に逆にやられる可能性があるためだ。

ほむらは前の蒼井彰との戦いで時間停止の魔法を破られ、やられ
ている。

その例もあつて警戒しているのだろう。

（慎重になるのも仕方ないか。早いところ一つの攻撃パターンを把握しないと……）

そう思つた矢先、黒い化け物の背中から一本の触手が現れた。

それは鞆のようになりながら、
森子ひやせやかを襲つた。

セやかが紙一重で遊行つゝ懸念を口にした。

「人気の無いところだからってこれ以上長引くとまずいぞ。邪魔なのが増えたらやり直し！」

避けながら帽子はせやかにそいつに付いた。

「数多い相手ならアンタのほうが得意でしょ！」

わやかは先ほどの杏子がやつて見せた『ロッソ・ファンタズマ』のことをさして言った。

「ありや 結構魔力使うんだよ！ そう連発できないんだよ！ ！」

杏子は襲つてきた触手を切り裂いた。

だが触手は切つたそばからすぐに再生してしまった。

杏子はその様子を見て舌打ちをしてさやかとほむらのほひに駆け寄つた。

「埒あかねーで。どうする？」

杏子がそう呟くとほむらがそれに対し口を開いた。

「私が困になるわ。その隙にヤツの弱点を狙つて」

今、厄介なのは自由自在に動き回る一本の触手だ。

弱点と思われる場所を攻撃し、何が起るかわからないが、今は一か八かに賭けたほうがむしろ良い時かもしれない。

「大丈夫なの？結構すばやいよ」

「心配ないわ。時を止めながらなら充分よけられる」

さやかの心配にほむらは笑みを浮かべて言った。

「よし、じゃあその作戦で行こう。アタシとさやかで危ないと思つた時は援護するよ」

「頼むわ。それじゃあ行くわよー」

ほむらはサイレンサーの付いた拳銃を盾から取り出すと、黒い化け物に向かつて駆けて行つた。

杏子とさやかはお互に黒い化け物に気付かれないように移動し、挟み撃ちになるように動いた。

黒い化け物は、じつやうほむらのことしか頭に無いようで、ほむらを執拗に攻めていた。

ほむらはそれを能力を駆使しながら避け続けた。

一本の触手がほむらを襲いに行つた。

ほむらはそれを時を止めて避けた。が 。

「...」

能力を解除するタイミングを狙っていたのか、丁度いい位置にもう一本の触手が迫つていた。

ほむらはそれを間一髪で避け、幸い髪の毛をかすつた程度すぎた。だが無理やり避けたため不自然な体勢となり、身動きが取り辛くなってしまった。

そこを狙い、黒い化け物の手がほむらを捕まえた。

「うぐつー」

大きな手に捕まつてしまい、まったく抜け出せなかつた。

黒い化け物は両手でほむらを包み、完全に動きを封じると触手で狙いを定めた。

「ま、まずい！」

もがくが一向に抜け出せない。

触手がビクビクッと動いた。

動いたと思ったたら、触手はだらんと力を失い、溶け落ちていった。

『おおおお』

そして次々と黒い化け物に身体は溶けていき、最後には跡形も無くなつた。

解放されたほむらは一息つきながら着地した。

「大丈夫か？」

杏子が駆け寄つてきた。

逆方向からさやかも近寄つてくる。

ほむらは一人を見て頷いた。

「問題ないわ。髪をかすつただけ……。髪は伸びるし、リボンくら
い幾らでも替えはあるわ」

「やつか、それならよかつた」

杏子はほむらの言葉を聞いて安心すると、武器をしまった。

だがさやかは武器をしまといいか、それをほむらに向かた。

「お、おこー何やつてるんだよ、やつかー！」

杏子は思わずさやかの行動に珍しく動搖していた。

剣を向けられたほむらの表情は相変わらずのポーカーフェイスだつたが。

「あんた……ほんとにほむらー。」

さやかは突然意味不明なことを言つた。

「見てわからぬかしら？」

見た目では誰が見てもほむら本人だ。

だがさやかが引っかかったのはある言葉だった。

「あんたさ、『リボンくらい幾らでも替えはあるわ』って言つたよね？」

「それがどうかした？」

「普通のほむらならあつえないのよ。だつてそれ、まどかがプレゼントしたものじゃない」

セやかがそう呟つたとこで杏子も思ひ出した。

今、ほむりが髪を結ぶのに使つていたリボンは、昨年のクリスマスにまどかがほむりにプレゼントしたものだった。

そしてそれを異常なほど大事にしていたことも思つ出した。

「普段のアンタならありえない。アンタ何者ー！」

セやかが戦闘体勢をとつた。

「ふふ。美樹セやか……意外と鋭いわね」

ほむりがそう言つ終わつた時にはすでにセやかの前にほむりは居なかつた。

時間を止めた。

セやかが認識した時には杏子が氣絶し、倒れよつとしていた。

「あ、杏子ーほむり、あんたー！」

ほむりの目的がまるでわからない今、自分たちの動きを封じるためなのか、命を奪うことが目的なのか そのどちらかでどう行動するべきか判断は分かれた。

ただ動きを封じるだけなれば、セやかがとるべき行動はほむりを一回倒すこと。

だがもし命を奪つことが目的ならば、氣を失つている杏子は絶好の標的だ。

今杏子を助けられるとすればそれはさやかしか居ない。

どうするべきかという選択肢。

さやかはまつたく迷うことなく、杏子の元に向かった。

もし杏子が氣を失つていなれば、間違いなく自分に構つなど言つてくるだろ？

確かに全滅するより、一人の犠牲で敵を倒せるのならそれは最善の策なのかもしない。

（だからって友達を見捨てられるわけないでしょー。）

さやかは敵を倒した先の未来よりも、友達を救うという現在を選んだ。

「愚策ね……さやか

「つーーー？」

さやかの身に強い衝撃が走った。

グラグラっと視界が歪む。

「友達も救えないで……未来なんか救えるわけ……ないでしょー

さやかはそう言い残して、杏子の上に倒れこむようにして氣を失つた。

「……」

ほむらは氣絶した一人を光のない日でただ見つめていた。

蒼井彰は佐倉杏子と美樹さやかの一人を背負つてその場を後にす
る暁美ほむりの姿を離れたところから見ていた。

「ししゃー……これって修羅場？」

綾女千里は仲間同士が争う光景を田にして青ざめていた。

「信じられない……ほむりちゃんがあんなことをするなんて」

田の前で起きた出来事が彰もまだ信じられなかつた。

「間違いなくほむりちゃんなんだよな？」

彰はそう千里に聞いた。

「記録している魔力の反応から本人だと思つんですけど……」

千里の千里眼は一度見たものしか追えない。

正確には見たものの魔力を記録して追う魔法のため、姿かたちが同じでもその者が持つ魔力が異なれば追うこととは出来ない。

「マスター、助けなくていいのですか？」

これまで黙つていた櫛咲双樹が連れ去れて行く杏子とやかを指して言つた。

「今は助けない。あの様子なら命を捕らうとしているわけでは無さそうだしね。なら後を追つて少しでも手がかりを掴もう」

それに彰はほむらがこのような行為をしたことに納得がいっていなかつた。

(何か理由があるのか……それとも操られているのか)

真意を確かめたい　　この気持ちが一番大きかつた。

「気付かれないギリギリの範囲で追おつ。千里は一応能力で監視しておいてくれ」

「はいやー」

彰たち三人は、ほむらの追跡を開始した。

「ししょー、反応が離れていくます」

「よし……」

千里の展開した地図からほむらの反応を示す点が離れていく。

彰はそつと壁から様子を伺つた。

彰たちがほむらを追つてたどり着いたのは開発途中で放置された小さなホテルだった。

「この辺りの開発は鷺宮さぎのみやという政治家が推し進めていたと聞いたことがあります。

だがその政治家はだいぶ前に汚職問題が露呈したことと自殺した。
結果として開発途中で話が無くなってしまい、かといって取り壊す金もない為に放置された建物が割りと多い。

（身を隠すにはついつけだな）

「しょー、もう大丈夫だと思います」

「じゃあ、中に入つてみよ。千里は」ここで待つてて

「えー！いやだあ！」

彰がそう言つと千里は黙々とこね始めた。

「こんなところちー一人じゃ怖いよお

「怖いって……魔女と戦つてるくせにお化けが怖いのか？」

「魔女は魔女で怖いし、お化けはお化けで怖いんですね~」

千里は瞳を潤ませながら彰にしがみついた。

千里は大人ぶつてはいるが、実際のところ一〇歳の子供なのだ。

お化けを怖がつてもおかしくはないが……。

（索敵能力は凄いけど、戦闘能力は皆無だからなあ。何が起こるかわからない所に連れて行くのも危険だ）

そう思つて留守番をせようと思つたのだが、今までは何を言つても言つことを見かないだろ？

「千里にはほむらちゃんが戻つてこないか監視しておいて欲しいんだ。いざという時に知らせて欲しい」

「それなら別にここに残らなくともいいじゃないですかあ」

「能力使いながら戦闘になつたら危ないだろ？」

「それはそーですけどー」

やはり離れようとしたしなかつた。

彰はため息をついた。

「マスター、なら私が残ります」

双樹の思わず申し出に彰は耳を疑つた。

「いいの？」

双樹は別の意味で千里より彰のそばから離すのが大変なのだ。

その双樹がここに残ると言つたことに彰は驚いた。

「ええ、マスターなら一人でも大丈夫でしょうし。私のことは気に

しないでください。前よりは私も一人で居られるようになりましたから

双樹はそう言って笑顔を見せた。

「そつか。なら任せようかな」

彰は双樹と残るように千里に指示し、千里もそれで渋々納得した。

「じゃあ、行って来る」

彰は一人に見送られながら、ホテルに向かっていった。

ホテルの建設はほぼ完成間近だつたため、内装もほとんど出来上がつており、綺麗にすればすぐにでも営業できそうなレベルだつた。

小さいながらも高級感があり、金持ち層を狙つていたのが伺える。

「ここは泊まつてみたいもんだねえ」

あおいあきひ
蒼井彰はそうぽやきながら、家族旅行に一度も行つた事ないなど
かなんとなく思つた。

彰は少し歩き、ロビーの中心まで来ると周りを見渡した。

中心にはカウンターがあり、左右にエレベーターが配置されてい
る。

左のエレベーターの隣に非常階段への出入口があるくらいで、
他に特に入れる部屋は無いようだつた。

（エレベーターはもうろん動いてないだろ？から、非常階段で行く
しかないかな）

外から見る限りで階数は五階まで。

階段で見て回つてもそんなに苦ではない。

そう考え、彰は非常階段に向かつて歩を進めた。

「……」

だがそれを阻止するかのように、地面から白い人型の化け物が一
体姿を現した。

「番入つてどこかな？やつぱりここに何かあるんだな」

彰は変身し、大剣を構えた。

化け物は口にエネルギーを溜め、そして左から右へ、横線を引く
かのように光線を放つた。

彰はそれを難なく避けると、一気に間合いをつめた。

化け物は巨大な足を持ち上げ、近づいてきた彰を踏み潰そうと足
を降ろした。

だがそれも避けられた化け物は地団駄を踏むかのように両足で足
踏みをした。

「そんなノロい攻撃受けるわけないだろ」

無我夢中で足踏みをしている化け物の肩に、彰は着地した。

化け物が首を動かし、彰を見ようとしたタイミングに合わせて彰
は大剣で額の石を突いた。

化け物は雄たけびをあげながら溶けて消えた。

彰は兜をはずすと、化け物の消えた跡を見た。

「何なんだ……？刺した瞬間、嫌な感じが俺の中に入り込んできた
……」

彰は大剣をしまつと、胸に手を当てた。

(「の嫌な感じ……罪悪感？なぜ？」)

妹の明奈の願いにより、彰は『無かつたことにする』能力とは別
の能力を身につけていた。

その能力の影響で、たまに相手の感情が流れ込んでくることがある。

きつと今のも化け物から流れ込んできた感情が彰にびりびりわけ
か罪悪感を覚えさせたのだ。

(これは思った以上に大きな何かが起こっているのかも知れない)

彰は一抹の不安を覚え、先を急いだ。

* * * * *

1時間ほどかけて五階まで見て回った彰は、ロビーに戻ってきて
いた。

結果から言つと、何もなかつた。

「ここに連れて来られたはずの佐倉杏子も美樹さやかも見当たらな
かつた。」

（じうこつ）とだ？ 何か見落としているのか？）

改めて彰はロボーを見渡した。

そしてふと、先ほど戦つた化け物のことを思い出した。

（現れた敵はロボーの一体だけだった。上に行かせたくないなら各階に居てもおかしくないはず……。まさか！）

彰は左右のエレベーターをこじ開けて確認した。

「やつぱりな……」

右側のエレベーターには昇降機が無く、風の音だけが鳴り響く空間が広がっていた。

その空間は上だけではなく、下にも伸びていた。

「上に行かせたくないんじゃなくて、下に行かせたくないなかつたんだな」

彰は昇降機のロープを掴み、下に降りていった。

「ようど一階分降りたところで空間は終わっており、開きっぱなしの扉があった。

扉から地下一階に足を踏み入れた。

エレベーターから出てすぐとにかく頑丈そうな扉が姿を現した。

扉の横にタッチパネル式の画面が配置されており、ここに暗証番号を打ち込めば開くのだろうと容易に想像できた。

「駐車場にしては行き過ぎだな」

Hレベータには地下一階に行くためのボタンは無かった。

つまりこのフロアは非公式な場所なのだ。

一部の者しか知り得ないであろう場所、そしてこの異常に頑丈な扉。

想像できる答えそれは 。

「シェルターか。政治家の考えそういうことだ」

彰は呆れ顔でため息をつくと、なんとなくタッチパネルに触れた。

するとタッチパネルの画面が点灯し、暗証番号の入力を促す文字が表示された。

「電気がきてるのか?」

彰は扉に手を触れた。

「さすがに壊すのは無理だな……。なら、無かつたことにすればいい」

彰の手の触れた部分から扉が次々と消失していった。

扉が作られたという事実を無かつたことにしたのだ。

ショルターの中は真っ暗で先が見えなかつた。

さらに異様な臭いが鼻をつき、彰は思わず顔をしかめた。

(何だ、この臭い……？ととりあえず電気が通つているなら明かりをつけられるかもしれない。スイッチを探そう)

彰は手のひらに魔力で作り出した光の玉を浮かばせた。

(これだけ広い場所なんだ。スイッチは入り口のそばだうな)

彰は入り口付近の壁に重点を置いてスイッチを探し始めた。

「……」

彰はスイッチを発見するよりも前に思わず発見をした。

「杏子ちゃんにさせかちゃん……。マリマリもー！」

三人は地面に寝かれていた。

彰は^{じゅう}マリマリを抱きかかえた。

「傷はない……。息もしているし、ソウルジムが破壊されたわけじや無さそうだ。ん……これは？」

マリマリの首筋に奇妙な模様のイレズミのようなものがあった。

（魔女の口づけ？なぜこんなものが……）

他の一人にも同じものがあった。

奇妙なマークについては気になるが、とりあえず無事を確認できたことに彰は安堵した。

そしてある疑惑が確信へと変わった。

（やつぱりほむらひやんは単独では行動していない）

協力者、もしくはほむらを操る黒幕が存在する。

疑惑を裏付けたのはこのシェルター内に三人が居たことだった。

パスワードがない限りこのの中に入ることは出来ない。

ミサイルでもない限り破壊することの出来ないこの扉は、ほむらの能力でこじ開けることなど出来ない。

無論そういうた破壊行為の跡がないのだから無理あり開けようとしたわけでもないだろ？

ほむらが元々パスワードを知っていた可能性もある。

だがこれは政治家が作らせたものなのだから、恐らくは要人向けのショルターなのだろう。

相手が魔法少女とはいえ、そういうた場所のパスワードをそつそ

う知られるとは思えない。

ならば可能性は一つ。

パスワードを知る何者が存在する。

そしてそいつが黒幕なのではと、彰は考えた。

（とりあえず収穫はあつたな。しかしどうやって三人を連れ出そうか……）

三人を一人で担いでいくのはさすがに厳しい。

そう思いなんとなく周りを見渡した時だった。

「これ……電気のスイッチか？」

彰は偶然見つけたスイッチをオンにした。

バチバチっと音を立てながら入り口から順に電気が点いていく。

次第に露わになっていくシェルターの中の様子を田の辺たりにして、彰は目を疑った。

檻が数十個配置されていた。

檻は大体50人くらいは余裕で収容できるくらいの大きさで、高さは3メートルほどあった。

その光景だけでも充分異常だというのに、さらに異常な光景がそ

「こなあつた。

「な、なんだよ……これは……」

彰は思わず口元を手で覆ってしまった。

ビの檻もおびただしい血の跡が残されていた。

渴ききつていらないものまである。

中には肉片のよつたな物が散らばりまつてこる檻すりあつた。

「ぐつ……」

彰は吐きそうになるのを抑え、入り口の外まで駆け出た。

「はあ！はあ！一体何があつたんだよ……あれ……人の血だよな……？」

「これ以上こなあつると向だかおかしくなつてしまつよつな気がした。

（こんな所、千里と双樹に見せられない……）

彰は無理せつづけたまを背負い、ショルターを出した。

この現場を眺めた彰の中に吐き気を催すみつなるある推測が浮かんだ。

（俺の考えてこなあつたが本当なら早く黒幕を突き止めないと……）

今、彰の中には催す吐き気とは裏腹に使命感のよつたものがこみ上げていたのだった。

美国織莉子は穏やかな寝顔で眠る千歳ゆまと黒キリカの一人を見て笑みを浮かべた。

昨日から佐倉杏子が帰つてこなこと、ゆまは織莉子に泣きついて来た。

初めは手のつけようのない状態のゆまだつたが、キリカと喧嘩をしていりつたにつきもの調子に戻つた。

(喧嘩するほど仲が良いつてこのせいか、人のことを言つのかしらね……)

織莉子は音を立てないよつて立ち上がり、そつと家を出た。

織莉子は既に魔法少女に変身しており、また表情に何か決意のようなものも浮かんでいた。

「こんな時間にどこに行くんだ？ 美国織莉子」

織莉子は別に驚くこともなく声の主のほうに視線を向けた。

「あなたこそ何の用かしら…… 天音リンさん」

リンは口元に笑みを浮かべて織莉子に近づいた。

「いやあ……別に何か用事があるつてわけじゃないんだけどさ。ただこの暴走した忠誠にどう立ち向かうのか……それが気になつてさ」

「忠誠……ね。確かにあの子はそこを見誤っていたのかもしれないわ」

冷静にそう語る織莉子に対し、リンは声を出して楽しそうに笑つた。

「それがわかつててアンタはどうすんだよ?」

織莉子は目を瞑り、黙り込んで考えた。

「どうするのが一番なのかしらね……」

そして田をゆっくり開け、やつ曖昧な言葉を口にした。

「へえ……意外だな。アンタならサッパリと殺すつて言つやうなんだけどなあ」

「私、そんなに野蛮な人間に見える?」

リンは「いいや」と首を振つて否定した。

「あなたは見た田とは裏腹に結構残酷よね?」

リンは口元に笑みを浮かべたまま、しかし視線は鋭くして織莉子を見た。

「アンタ、一体どんな未来を視てているんだ?」

リンがそう聞くと、今度は織莉子が笑みを浮かべて見せた。

「気になる？あなたの未来が……」

「……」

リンの表情から笑みが消えた。

なぜなら織莉子の表情に浮かんでいるものは、まるで興味のない物を目の前にした時のそれだつたからだ。

織莉子の視た未来には天音リンという存在は大した価値が無いそう言われていよいよつなものなのだ。

「あなたが今ビビつていいかはわからぬけれど……一つ忠告しておくれ」

「忠告？」

織莉子は頷いた。

「重要なのは未来じゃないわ。本当に知るべきは過去に起きた出来事なのよ」

リンには織莉子の言つてることの真意がまるで汲み取れなかつた。

「過去が意味のあるものでなければ、未来は何の価値もない。空っぽの箱の中を覗くようなものなのよ」

「どういう意味だ？お前、何を覗たんだ？」

リンがそう聞いたが、織莉子はそれに答へずただ首を横に振つた。

「今見てこむ世界がすべてだとは思わないほうがいいわ。未来なんて元々不確定要素の塊……。小さいことですかぶつてしまつもの。でもそれとは違つ……。不確定とかそんなレベルじゃなくて、今視える未来は本当に空っぽなのよ」

諦めたような、絶望してこむようなそんな気持ちを含んだ口ぶりで語つた。

「だから何を言つているかわつぱり……」

「私もわからないのよ。何を言つていいのか……。でもその答えをもしかしたらあの子は知つているのかもしれない」

織莉子は懐から一枚の手紙を取り出した。

「私、招待されているの。もう行かなくちゃ」

そうこうと織莉子はリンに向かって

リンは振り向くべくなく歩いてくる織莉子を黙つて見つめた。

そして見えなくなつたといひでリンはため息をついた。

「今見てこむものがすべてじゃない、か。すくてもくそもねえよ……。オレはなんで鹿田まどかの力が欲しいのかすらわからねーんだから……。『世界のすべて』の前に、オレ自身のすべてを知りたいよ」

リンは顔をかみ締め、誰に言つてもなべつけた。

まじかはただ発信音を鳴らすだけの携帯画面を見つめ、瞳を潤ませた。

昨日、別れたあとからさやかと連絡が取れなくなっていた。

同様にマリとも連絡が取れない。

恐らく杏子も行方がわからなくなっているのだろう。

「どうしよう……。私のせいだ……」

まじかは力なく崩れ落ちて膝をついた。

手から零れ落ちた携帯電話は幾度と聞いた留守電アナウンスを流していた。

どうすれば良いのか。

まじかが途方に暮れているとき、突如携帯電話が着信を知らせた。

まじかは急いで携帯電話を拾い上げ、画面に表示された発信者の名前を確認すると電話に出た。

「……」

「まじかさん……？ 今、ビニリーノのー？」

まどかは相手の応答を待つよりも早く、口早にやつ聞いた。

『今、学校の近くよ。すつとまどかの』と探してたの』

聞きなれた声にまどかは涙を流して安堵した。

「私もずっと探してたんだよ・すく・心配したんだから……」

『じめんなさい……。私も今までビビリ居たのかわからなかつたの。気付いたら見知らぬ場所に居て……やつといままで戻つてきたのよ』

「やつぱりほむらやんも……。あのね、ちやかちやんもマリさんも連絡がとれないの。もしかしてほむらやんと同じなんじゃないかな?」

『ちやんかもしれないわ。もしそうならまどかも危ないわ。とりあえず合流しましょう』

「うん。私も学校にいるから……」

『わかつたわ。ちやんに行くからそこから動かないで』

まどかはほむらに詳しい居場所を教え、電話を切った。

一刻も早く、ほむらの無事な顔が見たかった。

(早くほむらの顔が見たいよ……)

まどかは携帯電話に表示された時間を見た。

クロードに宣誓された時まであと3時間をきつていた。

「ほむりやん！」

まじかは三田ぶりに見る大切な友達の姿を目の前にし、我慢できず飛びつこうにして抱きしめた。

「良かつたよお。ほんとに無事で……。どこか怪我とかしてない?」

「大丈夫よ。むしろまどかに抱きしめられてる今が一番痛いくらい」

そう冗談を言いつつほむらは笑顔を見せた。

「えへへ。ごめん、ごめん。つい嬉しくて……」

まどかはほむらから離れ、改めて顔を見た。

ほむらの言葉通り、元気そうでもどかは心底ホッとした。

「私もまだかが無事みたいで良かつたわ。あとはさやかたちね……」

ほむらがそういうとまどかは不安げな表情を浮かべた。

ほむらは笑顔でまどかの手を握った。

「大丈夫よ。そつそつ簡単にやられたりしないもの。それにきっと私が助け出すわ」

「うん……。私も何か出来ないかな？」

ほむらはあまりまどかを危険なことに巻き込みたくないといつも

言つてゐる。

ほむらはあまりまどかを危険なことに巻き込みたくないといつも
言つてゐる。

その言葉通り、できればこれ以上この件に首を突つ込んで欲しく
ないのだろう。

「とりあえずは私たちの知つてゐることを確認しあいましょう」

ほむらは曖昧な返事を返した。

まどかはそれに対して反発する」とはしない。

それがほむらの優しさであることを知つてゐるからだ。

「まどかがここ」の生徒だと敵は当然知つてゐるはずよ。だったらこ
こは危ないわ。移動しましょ！」

まどかが頷くとほむらは手に取つたまどかの手に少し力を入れた。

「この手が離れないよ！」 そうこうつ思いを感じた。

まどかはそれに応えるよつてほむらの手を握り返した。

まどかとほむらは息を切らしながらやつとの戦いで建物の裏に身を隠した。

「はあーはあー。」

まどかはすつと走りつぱなしで息があがつてしまつていた。

「大丈夫? まどか……」

ほむらは心配そうにまどかを見た。

まどかはなんとか笑顔で返して「大丈夫」と言つた。

魔法少女でなこまどかには体力の限界がある。

そつこつとでもほむらの足手まといにしかならない。

『私を置いて逃げて』

そう口にしかけるが、高鳴る心臓をなだめながらグッともの言葉を飲み込んだ。

(私のためにほむらちゃんは戦ってくれているんだ。ほむらのやかんの気持ちを無碍^{むげ}にするよつなことしたら失礼だよね)

まどかは一度大きく深呼吸をした。

だいぶ身体も落ち着き、再び走れるだけの状態には戻った。

「 もう行ける? 」

「 うん、 大丈夫! 」

ほむりは額くと、先行して建物から飛び出した。

まどかもほむりを追いかけるようにして飛び出す。

『 おおおおー! 』

恐ろしい雄たけびがまどかの耳をついた。

「 ま、 またきてるよー! 」

「 大丈夫、 私たちの足でも逃げ切れるわ! 」

まどかたちが学校を出てすぐに長身の白い化け物に襲われた。

何体もいるのか、 卷いても巻いても襲ってくる。

明らかに狙われていた。

「 まじか、 こいつよー! 」

ほむりに促され、 まどかはトンネルの中に入った。

当然、 白い化け物も追つてくるがスピードがあまり早くないため、 何とか乗り切れそうだった。

どんどん離れていく化け物を見ていると、やはり自分が狙われているのだという実感がひしひしと沸いてきた。

実感すると共に、ほむらたちを巻き込んだあげく取り返しのつかなくなる寸前まできてしまったことに後悔した。

(ちやんと叫ぶなきや。||田前のことー)

「ここまで来てしまった以上、眞実を話してほむらに敵を知らせるべきだわ。」

「ほむらちやんー待つてー！」

ほむらはまどかの呼びかけに足を止めた。

「どうかした？ もうすぐ出口よ。そこまで行けば身体を休められるわ」

「ううん、違うの。話があつて……。ほんとなりもつと早く話すべきだったんだが」

「わかった。でも立ち止まつてると危ないわ。先を進みながら聞くわ」

まどかが言おうとしていることの重大さに感づいたのか、ほむらはそう提案した。

一人は先ほどよりは少し速度を落としながら走った。

「あのね、三日前からなんだけビ……私、ある人に会ったの」

ほむらは何も言わずに前を向いたままだつた。

しかしまどかの声がしつかりと聞こえる間合には保つており、むしろ話の腰を折らないための配慮と言えた。

まどかはそう感じ取つて話を続けた。

「おじやんと言つよりかは、もつおじにちやんに近いのかな?ビ」
かのお屋敷に仕えているつて言つてた。その人に私、急に凄いこと
言われて……。ちよびどりんな感じのトンネルを抜けたところ

「

まどかの足が止まつた。

少し前でほむらも立ち止まつた。

二人の立つているすぐ田の前がトンネルの出口で、その先には見覚
えのある噴水広場が見えていた。

「な、なんで……?」じりじりて……。ね、ねえ、ほむらやん?」

足が震えていた。

ほむりに促されてたどり着いた先が、クロードがかつて結界の中と
答えたその場所だった。

また迷い込んだのか?

しかしそむりは最初から「」を呟いていたかのように行動していた。

「ねえ、」には危なこよ……。早く出みづー。」

「その必要は無いわ」

淡々と、感情無く、吐き捨てるかのように呟つづつと、そむりが振り向いた。

まどかはほむりの皿を見てゾッとした。

輝きの無い、死者よつなの皿。

「まどか、クロード様がお待ちよ」

まどかの頬に一筋の涙が伝つた。

「嘘だよ……。こんなの……」

まどかは前の出来事がまるで理解できなかつた。

思考停止状態と書いていいほど、まどかの頭の中は真っ白だつた。

それでもまどかの瞳からは涙が流れ続けた。

何がどうしてそんなに悲しいのか、それすらまどかを考えられなかつた。

感情の無い皿でまどかを見つめるそむりは、最早まどかの知つてい

るほむりではない。

一番大切な、信じて疑わない友達が口にした言葉の先にあるものは、敵に仲間を売る行為に他ならない。

思考力を取り戻してきた頭に浮かんでくるのは、『自分は裏切られたのか?』『どう』とだつた。

今まで共に築いてきたほむらとの思い出を思い返せば思い返すほど、ほむらが裏切るような人間ではないことをほむらの中で裏づけていつた。

だからこそ聞かずにはいられなかつた。

「ほむらちゃん……何かの間違いだよね?きっと何か理由があるんだよね?」

ほむりは何も答えなかつた。

「間違えでは、ありませんよ」

「……?」

ほむりの代わりに答えたのは低いがよく通る声の持ち主

クロ

「ドだった。

「暁美ほむりさんは、その手であなたを『ここ』に導きました。そしてあなたのお友達を陥れたのもね」

「わやかちゃんたちも……?」

さやかたちの行方について何も知らない そんな風な態度をとつていたほむらだが、それも演技だったといふのか。

「予告の三日後でまだ少し時間がありますね。まあ、舞台はもう整っているのですが、そこは時間厳守としておきましょう。ですかうどうですか？私と暁美ほむらさんの出会いのお話でもいたしましたようか？」

「出会いたときの話……？」

「ええ、三日前……。あなたと出会い少し前の話ですよ」

ほむらはキュウベえとは別のインキュベーターである『ゴンベえ』に呼び止められていた。

「ろくな話ではなないのでしゃつへじゅせお前もキュウベえと変わらなにのだらうし」

ほむらがそういうと『ゴンベえ』は大きさに首を振つて否定した。

「先輩と同じだなんでもつたいたいなこつよー。オイラは名前すらもひえないただの量産型っすから。『ゴンベえ』って名前だつて名無しの『ゴンベえ』からつて、『ゴンちゃん』がつけたものっすからねえ」

『ゴンベえ』はケラケラと笑つた。

「……」

『ゴンベえ』はキュウベえと違ひ感情を表現できるらしい。

そのためキュウベえより人間的で接しやすくなつてこ。 と

これが『ゴンベえ』自身の説明だ。

だがほむらからすれば感情が余計にある分、キュウベえよりも何を考えているのかわからない。

そういう意味ではキュウベえより気味が悪かつた。

「それで話つて？」

「あーせつっす、そうっす。実はここんとこ街を荒らしてる奇妙なヤツがいて困つてんすよー」

「奇妙なヤツ?」

魔女や使い魔ではない。

ほむらはすぐにそう悟つた。

誰よりも魔女のことを知つてゐるはずのインキュベーターが対象のことを『魔女』や『使い魔』と言わず、『ヤツ』と表現したのがインキュベーターにとつても未知の存在であることを物語つていた。

「とにかくテカいやつで白いローブに身を包んだ人型の化け物なんす。どうも普通の人にも視認できるみたいなんすよね」

「一般の人にも?」

「そーなんすよー。そいつら見境無く人を襲つてはどつかに連れて行つて……。おかげオイラたちの商売も上がつたつりすよ」

インキュベーターたちのことなどはどうでも良いが、普通の人にも見える上に、人を襲つてゐるとなればこれは困つた話だ。

ほむら自身、正義のヒーローを氣取るつもりなど毛頭ないが、まどかの身の回りの人に被害があつてはまどかが悲しむ。

(私つて一日中まどかのことばかり考えてるわね……)

それが当たり前になつてゐる自分に対してもむらは苦笑した。

「いいわ。案内して」

「さつすが話がわかるつすねー！」

「ゴンべえは営業スマイルをしてほむらに礼を言つた。

ゴンべえに案内された先に、その敵はいた。

ほむらはハンドガンタイプの銃では効果が薄いと感じ、ショットガンを盾から取り出した。

「ゴンべえは額の石が弱点だと言つていた。

敵はほむらの姿を見失つており、辺りをウロウロしている。

ほむらはその隙に敵の背後に回りこみ、時間を停止させた。

敵の額の石にショットガンの銃口を押し当て、ゼロ距離から引き金を引いた。

ショットガンの弾の先端が少し額の石に食い込んだところで静止した。

ほむらはそれを確認すると、敵から一定距離離れてから能力を解除した。

その瞬間静止していたショットガンの弾は一気に額の石を碎き、そのまま頭を貫通した。

『おおおおおー..』

なすすべなくやられた敵はドロドロと溶けて消えた。

「思ったより大したこと無かつたわね。でも一体何のかしら?」

戦いは終わった そう思ったこと、それがほむらの油断だった。

ビリからともなく触手が伸びてきてしまむらの両腕を封じた。

「なつー?..」

一瞬遅れて状況を把握した時にはすでに手遅れだった。

さりに別の触手が次はほむらの足を拘束し、完全に身動きが取れなくなつた。

「一体何なのか?その質問にお答えいたしましょう」

「ー?..」

前から歩いてきたのは執事服に身を包んだ初老の男だった。

「あなたが倒した化け物を私は魔獸と名づけ、呼んでいます」

「名づけた？あれはあなたが作り出したものだと誓つの？」

男は頷くと、ホテルの案内人のように右腕を右方向に流し、『どうぞこちらを』覗ください』と言わんばかりにほむらの視線を促した。

するとそこに先ほど倒した白い化け物が地面から生えてくるように姿を現した。

「こやつは人間をベースに作り出されたノーマルタイプの魔獣です。あなたも戦つてわかつたとは思いますが、大した戦闘力はありません」

男は当たり前のことを語るよつに説明をした。

だがほむらには耳を疑う言葉が男から発せられたのを確かに聞いた。

「人間をベースについて……。まさかそいつは……」

男はニヤリと笑った。

「お察しの通り、これは元は人間です。どこにでもいる人間……。私の能力は生き物を魔獣に変異させるのですよ」

「……」

ほむらは背筋が凍るのを感じた。

今、敵だと思い殺した化け物がもとは人間だったというのだ。

間接的とはいえ、ほむらは何の関係も無い人間を殺してしまったのだ。

「人を殺してしまった……そつあなたは思い悩んでいるのでしょうか？」
「あけみ 暁美ほむらさん？」

男は変わらず口調でそういう言ひながらほむらに近づいた。

「悔やむことはありませんよ。アレはもう人ではない。あなたのため用意した捨て駒という名の化け物なんですから」

「私の……ため？」

男の視線がほむらの足元に向いた。

ほむらも同じようにその方向に視線を向けた。

「ゴンベえ様です。ゴンベえくん」

セリにはやはり営業スマイルのゴンベえが居た。

「鹿田まどかを契約せらるるんなら向でもやるつすよ。クロードさん」

と、ゴンベえはほむらにとって聞き捨てなら無い発言をした。

「あなたたち、まどかを狙つているの……！」

「ええ。そのための重要な駒が欲しかったのです。それがあなたと

いうわけです」

「ぐつ……あなたたちになんか協力するぐりこなら死んだほうがマシよ。」

男
クロードはほむらに手を伸ばし、頬に触れた。

「あなたならきっとやつぱりと黙っていました。でもそんなことは関係ないのですよ」

「なつー?・ちよつ、せめてー!」

言葉で反抗しても身体が動かせない今の状態では結局されるがま
まだつた。

両肩が露わになるとこまで破くと、クロードは手を止めた。

「ほむらさんは、ヴァンパイアをご存知ですか？」

ほむらは睨み付けるだけで何も答えなかつた。

クロードは構わず続けた。

「私の生まれ育つた国では結構馴染み深い怪人の類なのですが、ヴァンパイアの中には血を吸つた者を従順な僕に出来る力を持つた者も居たそうです」

クロードはほむらの右首筋を撫で、笑みを浮かべた。

「さよりどあなたのように綺麗な女性がとても好みだったのでしょうか。ですが私は雑食なもので……。あまり好みとか無いのですよ」

クロードが歯を見せて笑つた。

「……」

クロードには映画で見たヴァンパイアのように鋭い牙が生えていた。

そしてほむらは先ほどのクロードの話との関連性に気付き、戦慄した。

噛まれればこここの言こなりになつてしまつ。

ほむらはあらん限りの力で拘束から抜け出そうとした。

だがどう抵抗しようと触手が緩むことは無かつた。

「安心してください。別に私は血を吸うわけではありません。その逆……私があなたに注ぎ込むのです。私の魔力を」

クロードはほむらの首筋に噛み付いた。

「うう……」

全身に電気が走ったような感覚を覚えた。

手足が痺れ、どんどん力が抜けていった。

クロードが離れた時には拘束が無くとも身動きが取れないくらいに身体の力を失っていた。

「私に噛まれたものには決まつた末路が待っています」

ほむらは何とか首を動かし、クロードを見た。

「私には噛まれた者はまず、その証として首筋にマークが刻まれます。次第にあなたはあなた自身の思考力を失い、私の僕となります。これが第一段階」

人差し指を上げ、『1』の形を作った。

「第一段階は私が注入した魔法毒が全身を蝕み、凄まじい苦痛に見舞われます。並みの人間なら痛みに耐えかねて死に至るでしょう。死に際は凄惨ですよ。痛みの余り全身を搔き毬つて大量出血したあげく、最後はドロドロに溶けてただの肉片と化します」

今度は搔き毬る動作をして哀れみの表情を浮かべた。

「最終段階……。もし死に至らず生き延びることが出来れば、魔獣として生まれ変わります。ただ人を襲うだけの……化け物へとね」

クロードは体勢を低くし、力なく見つめるほむらに視線を合わせた。

「後ろを見てください」

まともに動かすことすら出来ないはずなのに、クロードに言われ

るとそういうしなければならないという感覚に襲われた。

無理やり身体をひねって、ほむらは後ろを向いた。

向いた先には先ほどと同じ姿かたちをした魔獣が居た。

ただ色が全身真っ黒だった。

「あれがあなたのなれの果てです」

「……？」

「普通の人間と違い、魔法少女は強力な力を秘めています。ですか
ら魔法少女が魔獣になるとあのよつてに種が産まれやすいのです」

ほむらの田から涙がこぼれた。

化け物に変わってしまった恐怖からか。

操られまどかを陥れるための駒として使われることへの痛みか。

自分の意思を失いかけている今のほむらにはなぜ自分が泣いてい
るのかすらわからなかつた。

ほむらはそのまま氣を失つた。

クロードはほむらを抱きかかえた。

「さあ……あなたにはお嬢様のために道化となつて頂きますよ」

まむりを抱えたまま、クロードは姿を消した。

「ひどいよ……」

クロードの話を聞き終えたまどかは震える口から言葉を何とか吐き出した。

クロードはそんなまどかを黙つて見つめた。

「ほむりひやんを返してよーー。」

まどかはクロードの手を真っ直ぐ見返し、人外の存在である相手にも怯まずに声を張り上げた。

そしてまどかはクロードとの距離を縮めよつと一歩を踏み出した。だがそれはほむりひよつて遮られた。

「ほ、ほむりひやん……」

ほむりは銃口をぴつたりとまどかの額に合わせ、引き金に指を当てていた。

これ以上近づけば容赦なく撃つ。

やつこつ気配がほむりにはあった。

「ほむりひやん……」

操られていくとわかつていても、ほむらが取つた行動はまどかの心を大きく抉つた。

「ふふふ。わかつたでしょ? あなたの声は届きませんよ。あるのは私への忠誠心ですから」

クロードはほむらに合図を出し、銃を降ろさせた。

「さて……時間も一度いいですし、本題に入りましょう」

クロードはそうこいつと指を鳴らした。

するとクロードとまどかを囲むよひよひと黒の魔獣が地面から一斉に出現した。

「...」

まどかはその光景にゾッとした。

魔獣の数はざつと見た感じで30体以上はある。

「これが全て元は人であつたり、魔法少女であつたと思つと、クロードという人物の残酷さが身に染みてわかる。

「まどか様……あなたは先ほどほむらさんを返して欲しい、そう言いましたよね? その願い、聞き入れてもいいですよ」

「えつ?」

「実は第二段階に入る前でしたら、魔法毒を無効にする」ことが出来

るのです」

クロードは懐からグリーフシードの形をした物体を取り出した。

「これを首筋のマークに当てるとい、魔法毒を吸出して無効化します。ちなみにこれはほむらさと専用で、代わりはありません」

物体をまどかに向けちひりかせるとすぐに懐に戻した。

「どうしたら……それを渡してくれるんですか?」

「ふふ。簡単な取引をしまじょい」

「取引……?」

「ええ。なんてことは無い。まどか様、あなたが魔法少女になり、ソウルジエム すなわち命を差し出してくださればいいのです」

「……」

三日前にクロードが予知していたこと。

「その意味がよくやく理解できた

「そんな……そんな」とのためにほむらさとを……」

「そんなことなんてあつませんよ。あなたの力を手にするとじが出来るのであれば、充分すぎるほど釣りがでます」

どんな手段を使ってでもと公言したよつて、クロードはいつてほ

むりを利用したことは単なる手段でしかない。

クロードからすれば、ほむらという存在はそれ以外では何の価値も無いのだ。

ゆえに迷うこと無く殺す事だって出来る。

それを感じ取ってしまったからこそ、まどかはこの状況に混乱してしまっていた。

「あと3分待ちましょう。その間に契約しなければこの解毒剤は破壊します。ちなみにこの解毒剤だけを奪つても意味はないですよ。何せ、人質はほむらさんだけではありませんから」

さやかたちのことを指していた。

確かに運がよければほむらの解毒剤を奪うことが出来るかもしない。

だがそのようなことをすれば、さやかたちの解毒は永遠に出来ない。

さやかたちの居場所も、解毒剤の在り処も、まるでわからないのだから。

「あと……お仲間を救うという願いをするのはやめたほうがいいですね。それを願った瞬間に全員、……殺します」

クロードが今までに無い鋭い眼光をまどかに浴びせた。

その瞬間、まどかは完全に冷静さを失った。

願い方次第ではクロードがほむらやたやかたちに手を下す前にどうにかすることも出来たかもしれない。

だがそんな気の回る願いを考える時間と、冷静さをクロードはまどかから奪つたのだ。

三日前の予告により、クロードは時間通りに事を遂行する人物といつ暗示をまどかに与えた。

結果、3分と決められた時間は絶対的なタイムリミットなのだとまどかは思い込んだ。

そして仲間を人質に取ることにより、まどかが仲間を救つために契約せざる終えないという状況を作り、その上で願いを制限することでまどかの冷静さを奪い、もしもの場合をのリスクを最小限にした。

まどかはクロードの罠に完璧にはまつっていた。

（ほむらさんは頭も回り、経験も豊富。ほむらさんを自由にしておけば、この場でまどか様の混乱を緩和させてしまい可能性もあった。ならば手中に収めておくのが上策……）

クロードは実を言つと普通の人間並の力しか持ち合わせていない。

魔法毒という特殊な力はあるにしても、真っ向から戦えば必ずといつていいほど敗れる。

それを補つのが知略だった。

自ら戦うのではなく、一歩引いたところで相手を罠にかける
それがクロードの戦い方だった。

クロードは自身の腕時計に手を向けた。

「3分、経ちましたね」

半錯乱状態にあつたまどかはその言葉で少し現実に引き戻された。

クロードは再び懐から解毒剤を取り出し、それを親指と人差し指でつまんだ。

「私は戦闘タイプではありませんが、これくらいを握りつぶすことは造作もないことですよ？」

まどかの位置からでもクロードの指に力が加わるのがわかつた。

「…ハナハナ、ハナハナ！」

クロードは口元を吊り上げ、視線をまどかの足元に向けた。

「はいはい、オイラに用つすか!?

このまにかまぢかの隣に「コンベエ」が居た。

ほむりのとせと変わりず、営業スマイルを浮かべて座つてゐる。

「ずっと待ち構えていたでしょ！」。まあ、それはどうでも良い事ですね

視線をまどかに戻した。

「では、まどか様……。願いをどうぞ」

まどかは胸元で手を握るとグッと力をこめ、心を落ち着かせるように、決心が揺らがないようにと一息ついた。

「私は……私はあなたになんか負けない……！。このあと、私がどうなるかわからないけど、それでも負けない！」

「支離滅裂ですよ。死んでしまつたらそれで負けではありませんか」

まどかは首を横に振つてそれを否定した。

「私が負けを認めない限り、あなたはずつと勝てない。どんな結果になつても、それはあなたの血口満足でしかないんだよ！」

「何を今更……。そんな屁理屈で私が揺れるとでも思つていいのですか？」

そう言いながらクロードは動搖していた。

クロードがまどかに持つていた印象はどこでモーる普通の少女であり、逆に言えば力なき一人の少女だった。

だがそんなまじかがこいつやつて屁理屈とはいえ力強い言葉を向けてくるとは思いもしなかつた。

誰が聞いても戯言を……と笑い飛ばす程度のことなのに、まじかが口にするだけでそれは神を相手にしているかのような威圧があつた。

（内に持つ潜在能力の高さがこの雰囲気を醸し出してこるのか？それとももつと別の何かを…）

クロードは今考へても仕方が無い」と と割り切つた。

「ああ、ゴンベえくん。よろしくたの……」

言いかけたとき、クロードはこの空間に発生した違和感に思わず周囲を見渡した。

「どうしたんすか？」

「風が……吹いている…」

「風……つすか？」

この空間はクロードが作り出した結界の中だ。

クロードが作り出せるのは風景のみで、風や雷など自然現象は作り出せない。

もし風がこの空間に吹いているとしたらそれは 。

（結界を破られた？）

クロードがその思考に至ったとき、突然それは起つた。

「グシャアー」と音を立てて、コンベーが木つ端微塵に弾けとんだのだ。

クロードはすぐに何が起きたのかを悟つた。

「狙撃だーお前達、口さえきければ構わないー鹿田まどかを拘束しろー！」

クロードの命令と共に魔獸たちが一斉にまどかに迫つた。

「ひつーーー！」

まどかは襲い来る魔獸の気迫に気圧され、瞬き一つある」とすり出来ずに固まつた。

だが次の瞬間、まどかを援護するかのように銃弾の雨が魔獸たちを襲い、まどかに『届く前に吹き飛んだ。

しかしその銃弾の雨をも潛り抜け、数体の魔獸がまどかの目の前へと迫つた。

もう駄目だ まどかは心の中でそう思つた。

「もう駄目つて顔に出てるよ。負けないんじゃなかった？」

「えー？」

「だからともなく、この場に不釣合いな優しい声がした。

その声がまどかたちの頭上から聞こえたことに気付いたのは、空から落ちてきた黒い塊が魔獣たちをなぎ倒した後の事だった。

「まどかちゃんを負けさせなんかしない。絶対に……」

この混沌渦巻く世界に嵐のよみに降り立つたのは漆黒に包まれた一人の騎士だった。

三日三?

「バカな……？」

クロードの動搖が伝わったのか、魔獸たちの動きが止まった。

動搖しているのはクロードだけでは無かつた。

田の前に立つ漆黒の騎士の姿にまどかも言葉を失っていた。

「」の瞬間までとても現実とは思えない出来事がたくさんまどかに起きた。

そんな非現実的なものを見てきてもなお信じられなかつた。

会いたいと願つた。

だがきっとその願いは叶うことは無いだろ?と心の中で思つていた。

その思いが田の前に存在するその人が現実なのか、まどかを惑わせた。

だから確かめずにはいられなかつた。

その名を呼ばずにはいられなかつた。

「彰……さん?」

騎士は顔だけまどかに向けて縦に一度頷いて見せた。

「あとで話せり。今はソレから逃げよ」

それだけ言つて騎士は再びクロードに向きをぬつた。

まどかは言いたい」とをグッと胸の奥にしまつて、騎士に従つた。

「あなた……なぜ生きてこられるのですか?」

クロードの問いに騎士は答えなかつた。

「話す必要は無い……。ソレにソレとですか? ならば……」

クロードが右手を上げ、魔獣たちに合図を送つた。

「お前達、あの男は殺して構いません。まどか様をどうぞ

クロードの言葉を一発の銃声が遮つた。

「え?」

まどかが間の抜けた声をあげ、そして何が起きたのか把握しようとした時には全て終わっていた。

気付いた時には騎士が自身の左肩に気絶したほむりを抱え、まどかも右肩に抱えられていた。

そのまま騎士はジャンプしてその場を離れていく。

離れていく最中、まどかは銃弾で頭を射抜かれて倒れているクロードの姿を見た。

先ほどの銃弾の狙いがクロードであったことの時のまどかは気が付いたのだった。

建物の屋上にたどり着いた騎士はまどかを降りし、ほむらをそつと寝かした。

「ほむりちゃんは？」

「大丈夫。氣を失っているだけだよ」

騎士
蒼井彰は兜をはずしてそれを消した。

彰の顔を見て、まどかは――瞬ためらいだ。

嬉しい反面、この二田間の経験がまどかを疑心暗鬼にしていたの

だ

「本当に……彰さんだよね？」

「正真正銘、本物さ。足もあるし、操られてるわけでもないよ」

彰はおちやらけた雰囲気で笑顔を見せると、数回足踏みをして足が地に着いていることをアピールした。

まどかはその様子を見て田を呑り上げて怒りを露わにした。

「なんで教えてくれなかつたんですかーーー？」

彰はまどかの怒りの原因が生きていることを黙つていたことだとすぐ理解すると、笑顔を苦笑いに変えた。

「まつと待つてたのーーー。全然、彰さんが来てくれないから私ーーー」

「「「めん……」」

何か気の利いた言い訳を言おつと思つていたのに、まどかの瞳に溜まる涙を田にしてその言葉しか口に出来なかつた。

「本当に会いに行きたかったんだけど、やっぱり自分がまどかちゃんたちにしてきたことを思つと出来なかつたんだ。出来ればちゃんとした形で再会できればよかつたんだけど……」「めん」

彰は取り繕つように何か云えたいことを言葉にした。

まどかはそれに泣きながら頷いた。

お互い、言いたい事がたくさんあるはずなのになぜかそれが言葉に出来なかつた。

「お取り込み中のと」「ひすみませんナビー」

沈黙を破つたのは千里だつた。

「えつと……いつの間に?」

まどかは涙を袖で拭ぐと、いつの間にか自分達の横にいた千里と双樹の二人に視線を向けた。

「すつといたよ」

そんなまどかを千里は目を細めて半ば睨むようにして見つめた。

「えつと……」

なぜ睨まれているのかわからぬまどかは助けを求めるように彰を見た。

「」の子は綾女千里。あやめちさともう一人が尊咲双樹。たるさきそうじゅ一人とも仲間だよ」

千里は「ふん」とそっぽを向き、双樹は礼儀正しく一礼をした。

「わ、私は」

「知ってるよ。だから別に名乗らなくていい」

千里が語尾を強めてそう言った。

まどかは困惑してビビりながらいかわからずに戸立ち去ってしまった。

「気にしないでいいよ。いつもあーだから」

そう彰がフォローをいた。

そして彰はまどかの頭に手を乗せ、「ひょひょひつと待つて」と言って千里たちのほうに足を向けた。

「まだ奴らは俺たちの場所を把握出来てないよね？」

「ですねー」

千里は地図上に溢れかえる点が無闇やたらに動いてることを確認し、そう言つた。

「よし、ならもう一度奴らに向けて一斉狙撃してくれる？俺は一人を連れてここを一旦離れるから」

「わかりました。すぐにマスターのあとを追います

「頼むよ、双樹。千里もね」

双樹と千里はタイミングぴったりに親指を立ててグーサインをした。

彰もそれに返すようにグーサインをした。

たるさきでうじゅ
樽咲双樹の主な武器はほむら同様に銃器だ。

だがほむらと違い、魔法で銃器を生成する。

そういう点においてはどちらかといえばマニアに近い。

双樹は配置されたバレットM82を模した狙撃銃にあわせ、身体を寝かせた。

対物ライフルに分類されるオリジナル同様に、魔法で生成したこの銃も軽車両くらいなら貫ける。

銃同様に魔法で生成した弾丸は発射された瞬間に分裂し、複数の位置に狙撃することが出来る。

だがこれはあくまでオプションとしての能力で、双樹自身はスナイパーでもなく、魔法少女であることを除けばただの女の子だ。

この狙撃銃を使用しているのもただ本で目にしただけという理由だし、魔法で生成した銃であればどんな形状だろうと飛距離や威力などいくらでも好き勝手に可変可能だ。

それでも双樹は狙撃する時はこの銃だし、近接戦闘ではいつもティザートイーグルを模した物を使用している。

それには双樹が持つ本来の能力に起因している。

双樹の魔法の性質、それは『依存』。

とにかく依存することでしか生きられない双樹はモノや人に対し
て異常な執着を持っている。

それを能力にしたのが『コ・ティペンドンシー』だ。

共依存の名を持つその能力は魔法少女を対象に依存することで発
揮する。

能力が発動するとソウルジエムとソウルジエムが精神的リンクを
はり、『依存状態』を作り出す。

依存状態に入ると双樹の精神は対象と融合し、相手が受けたダメ
ージを代わりに受け負う。

そのかわり双樹は相手の能力を一部借り受けることが出来るよう
になる。

相手に自覚はなく、無意識のうちに頼り頼られの関係を作り出す
のだ。

ただこの能力にも限界がある。

依存率により身代わりになるダメージも大きくなる。

精神的な融合であるため、受けたダメージは肉体ではなく精神
つまりソウルジエムに行く。

依存率があがれば借りられる能力の度合いも大きくなるが、それ

に固執してしまつと一瞬で魔女化してしまつ可能性もあるのだ。

（私自身がそうして滅びるのは構わない。私は依存することでしか生きられないから。でも私の全てを受け入れてくれる人が居ない……）

どの程度依存できるかは相手との相性による。

双樹の望みは100パーセント依存できる、受け入れてくれる人を見つけることなのだ。

（マスターは今まで出会った誰よりも私を理解してくれる。命を投げ出しても良いほどに依存できる。それでも私の求めている人ではない……）

彰と一緒に居るのは心地がいいし安心する。

実際に今はマスターと呼び『依存』している。

そんな彰でさえ、何か足りないと感じる。

（私は一体何を求めているのだろう……）

スコープの先に見える自我無きモンスターを見ていると、まるで自分のようだと思つ。

今はこうして彰のために戦つているが、そうじよつと決意したのは双樹ではない。

彰がそうして欲しいと望んでいるからだ。

双樹はそれが嫌だとか思つたことはないし、そういうことが幸せだとさえ感じる。

（なのに何か物足りない……）

双樹のソウルジエムが一瞬ぶるつと震えた。

リンクが確立された証だ。

（考えてもしようがない。今はマスターのために……）

双樹がリンクした相手は綾女千里あやめめいりだ。

千里の千里眼による追尾能力と組み合わせれば自動追尾弾の完成だ。

二人の能力の相性は抜群に良い。

それに気がつき、実践化させたのは彰だ。

「そーちゃん、準備オッケー？」

「いつでもいいわ」

双樹の『コ・ディペンドエンシー』は無意識のうちにリンクされるため、千里は双樹と繋がっているのかわからない。

だが「」のようにに意思疎通をすればその問題も解消できる。

リンクされていることさえわかれれば、意図的に敵の位置情報を双樹に送ることも出来るのだ。

「送るよー。」

千里は一度見た相手の魔力を記憶し、それを追跡する能力だ。

その魔力情報を双樹と共有すれば、千里とリンクし、一時的に千里の能力を使用できる双樹は千里の同じ相手を追跡可能になる。

双樹が覗くスコープの先に千里と同じ地図が展開された。

追跡するのは双樹たちではなく、弾丸。

双樹は引き金を一回引いた。

魔法で生成された弾丸は発射された瞬間、分裂して地図にマークされた敵に向かつて飛んでいった。

今回のように複数相手にする場合は狙う場所を指定できない。

あくまでマークされた相手に当てるだけで、当たったといふことは認識できても、どこに当たったのか、倒せたのかはわからない。

故にこの攻撃は殲滅するためではなく、逃げる時間を稼ぐためのものなのだ。

（何か変だ……）

双樹は違和感を感じた。

地図上のマーカーが次々に消えている。

だが当たった感覚が無い。

双樹は千里に視線を向けた。

千里も困惑の表情を浮かべていた。

マーカーが消えるということは対象の魔力の消失を意味する。

消失のパターンは二つ。

対象が死亡した場合。

もう一つは意図的に魔力を消した場合。

（この攻撃方法ではこんなに効率よく敵を殲滅なんて出来っこない。相手が人ならまだしも切つても焼いても死がないような化け物ならなおさらオカシイ）

双樹はスコープから敵の姿を確認した。

やはり姿が見えなくなっている。

魔獣も、クロードの遺体も

。

「え！？」

クロードの遺体も無い。

そんなことはありえない。

ありえないとすれば……。

「マスター……」

「ししょーーー！」

双樹と千里が同時に叫んだ。

地図には影たちのもとに向かいつかの反応が示されていた。

彰はまどかから魔獣の正体、そしてほむらがクロードに操られていたことを聞いた。

「やっぱり魔獣は元は人だったのか……」

廃ホテルの地下で見た惨劇の跡は人が魔獣に変貌する工程でつけられたものだつた。

ある程度予想していたことは言え、正直普通の神経で出来ることではない。

（俺だつて人殺しであることに違ひは無い。それでも手にかけたとき、やっぱり躊躇つたし、自責の念を感じずにはいられなかつた。でもあの執事にはそれがまつたくない）

嫌悪感を覚えずにはいられなかつた。

そして何より、まどかやほむらのことを思つと胸が痛んだ。

（追い込まれて、追い込まれて……。そして傷ついて……。なぜ彼女たちが幸せに過ごすことを許してくれないのでだろう）

そう思いながら、自分もかつてまどかたちを追い込んだ人間なのだと嫌悪した。

「彰さん……」

「ああ。ほむりちゃんを楽にしてあげよ。」

未だ氣絶するほむりの首筋にはクロードに噛まれた印が残つていた。

まぢかの話だとこのまま行けばほむらは魔獸化してしまひ。

そしてそれを阻止できるのはクロードの持つ解毒剤だけだといふ。

「解毒剤、か。必要ない」

彰はほむりの首筋に手を触れた。

すると首筋のマークが消え、心なしかほむりの表情が穏やかになつた気がした。

「毒を『無かつたこと』にした。これでもう大丈夫」

「よかつた……。でもさやかちゃんたちが……」

「それも大丈夫だよ。偶然、ほむりちゃんを追つてこるときに捕まつてゐる三人を見つけてね。念のため、三人の毒も『無かつたこと』にしどいたよ」

さやかたちを発見した時点では首筋のマークは魔女の口付けだと思つていた。

そのままでは魔女の言ひなりになつてしまつのではないかと思つ、といあえず『無かつたこと』にしたのだが、それが功を奏したようだ。

まどかは心からホッとしたようやくこつものかの笑顔を見せた。

「執事に魔獣にされた皆も救つてやらないことね」

数秒前に双樹と千里の一斉狙撃が行われた。

彰は敵が双樹たちに気が向いていたにまどかたちを連れて一旦結界から出ようとしたと考えていた。

だがそれは叶わなかつた。

「マスター……！」

「ししゃーーー！」

一人の叫びは緊急事態であることを知らせるには充分だつた。

「いやはや、まさかこのよつなトレギュラーが起きるとは思つてもいませんでしたよ」

頭を射抜かれ、死んだと思われていたクロードが彰の前に降り立つた。

「そんな！なぜ……！？」

「なぜ、といつことはないでしょ？ 私もあなたが生きていて本当に驚いたのですから」

ソウルジームが感じ取る気配からクロードは魔女ではない。

彰は、自分同様イレギュラーな契約者だと思っていた。

肉体を殺されれば、死んだと思い、ソウルジエムは機能しなくなる。

たとえどんなに強固な精神を持つていようと、『死』といつ感覺から逃げることは出来ない。

ソウルジエムを持つ以上、死なないはずがない。

(本当に吸血鬼なのか……?)

魔法少女なんものが居るのだから居てもおかしくは無さそうだが、だからと言つてそうそう信じられるものではない。

「もうお分かりでしょうが、私は不死身です。肉体をバラバラにされようと、爆弾で木つ端微塵にされようとも死にません。これがどういふことだかわかりますか?」

「……」

彰はそれがどういふことだか理解していた。

クロードはそんな彰の様子を見て高らかに笑った。

「聰明ですね、あなたは。私は死ぬことは無い。だがあなた方は傷つき、そしていずれ心の闇がソウルジエムを濁らせる。勝負の見えた戦いなのですよ」

クロードの語るそれは彰たちに勝ち田の無いことを嫌といつまでもわからせた。

「彰さんの力だつたらどうにかならないかな?」

『無かつたこと』にする能力でクロードの不死を無かつたことに出来ないか、まどかはそう聞いていた。

彰は首を振つた。

「不死が能力なら無かつたことに出来るけど、たぶんあの執事は産まれもつて不死なんだ。視覚や聴覚みたいに感覚を無かつたことは出来るけど、不死の身体を無かつたことにするとなると、あの執事そのものを無かつたことにしなくちゃいけない。でも俺の能力では命を無かつたことには出来ないんだ」

不死であることも厄介だが、クロードは能力で強力な味方をいくらでも作り出せる。

今ままでは彰たちに勝ち田は無い。

今この場ではクロードを倒す術は無いが、もしかしたら何か良い方法が見つかるかもしれない。

だがその術を見つけるためにはまずこの場から逃げなくてはならない。

無駄死には避けたい。

だがその逃走という行為ですら、この場においては相当の難易度

を誇っていた。

地面から次々と魔獣が姿を現した。

双樹たちが消えたと思つていた魔獣たちはクロードの手によつて一時的に消されていたのだ。

「多すぎる……」

彰は次々と現れる魔獣たちを目の前にし、唇をかみ締めた。

数は依然30体近くはいる。

彰一人ならば逃げ切れただろう。

だが今戦えるのは彰と双樹だけ。

千里は戦闘系の能力ではないし、ほむらは未だ気絶から目覚めない。

無論、魔法少女ではないまどかに戦闘など無理だ。

つまり彰と双樹の一人で三人を守りながらこの場から逃げなければならないのだ。

普通に考えれば到底無理な話だ。

だが決して余裕のあるものではないが、彰の口元には笑みが浮かんでいた。

「 まあさうだが、まとまってくれたのはラッキーだった

誰に言つわけでもなく、彰は呟いた。

そして群がる魔獣たちを決意に満ちた目で見つめた。

美国織^{みくにおり}莉子は人気の無い屋敷の廊下を静かに歩いていた。

そしてある扉の前で立ち止まつた。

まるでここだよ、入つておいで と言つてゐるかのように半開きの扉は揺れていった。

織莉子は扉を開き、一步中へと進んだ。

何て事のない普通の部屋だつた。

クローゼットに本棚、机。

半分開かれた両開き窓、その手前にベッドが置かれい。

この部屋の持ち主がかつて有名な政治家の娘のものだと知つたら、何も知らない者には意外と狭くて質素だなと思わせるかもしれない。

だが織莉子はベッドの上で上半身を起こし窓の外を見つめる少女が、いわゆる『金持ちの暮らし』にまつたく興味ないことをよく知つていた。

「お久しへりね、千鶴。気分はどう?」

鷺宮千鶴は大して驚く様子も無く、織莉子に視線を向けた。

「変な気分です。ずっと眠つていたはずなのに、私はしっかりと今

田覚めるまでの記憶を宿している……」

千鶴は枕元に置いてあつた小さな宝石箱を手に取った。

そしてそれを開けて中を確認すると微笑んだ。

織莉子は箱の中に大切に収められたソウルジエムを見て目を細めた。

「私に『招待状』を持つててくれたあの執事はやっぱり……」

「ええ。クロードは私の願いで生まれた人ならざる者……。本物のクロードはずつと前に亡くなっていますから」

「亡くなつた？」

「お父様のしたことを公にしたのはクロードだつたんです。でもそのせいでクロードは殺されてしまつた……」

千鶴は視線を落とした。

そして少し躊躇いがちに言葉を口にした。

「私がしつかりしていれば、勇氣があれば、織莉子さんのお父様もクロードも死ななかつたかもしぬ。私の弱さが生んだ惡意の連鎖がたくさんの不幸を招いてしまつた……。そしてそれは今も続いている」

「今のクロードさんは、あなたを田覚めさせることを行動原理として動いている。それは少なからずあなたの望んだことではなかつたの？」

千鶴は首を横に振った。

「私はつづく無価値だと思つことがあるんです。一体何のために産まれて、何のために今を生きているのか、まったくわからなかつた。眠つている間は、クロードの見たものが夢として流れてくるんです。眠つている私のことを屋敷の者達は『眠り姫』と呼んでいました。ただ眠るだけの価値無き者」

「……」

「本当にその通りだと思います。私は悪意から目を背け、そして自殺を図ることで逃げようとした。織莉子さん、私はあなたが思つてゐるほど、立派な人間ではないんです」

「……」

「ただ眠るだけの私の存在価値つて何なのか。クロードの目を通して夢で現実を見ながら、ずっと考えていた。そして見つけたんです」

「それつて？」

「ある人の助けになることです。その人はきっと私のことなど一切知らないのでしょうかけど、それでも構わないんです。私はその人のやううとしていることの一 片となれればいいんです」

それが鷺宮千鶴という人間の存在価値であり、存在証明なのだ。

だがその存在証明を残すことは一人では出来ない。

ましてや千鶴といつ人間では到底叶わない。

人には運命だとか神の導きだとか、到底普通ではありえない人生を歩むものがいる。

そういう者からすれば、千鶴は至って平凡であり、非凡な者の手助けをしようとすれば一人の力でまかなえる訳がないのだ。

結果として千鶴の持つ運命のキャパシティから漏れたツケがクロードの暴走を招いた。

「私はある人の手助けをするために、悪役を買って出たつもりだった。クロードは私に代わって私の願いを叶えようとした。それがクロードの忠誠心を助長させて、結果としてたくさんの犠牲をだしてしまった」

「止めることは、出来ないの？」

「クロードを消滅させることは出来ます。ですが、クロードに魔獣にされたものは救われないでしょう……」

この一件で生まれた犠牲は千鶴の罪だ。

クロードという根本を絶つたとしても犠牲者が元に戻ることは無い。

ならばクロードを生んだ千鶴がそれらを背負わなくてはならない。

「でも私にはそれを背負い、楽にしてあげることは出来ません。私にはそんな価値も力もないから」

「すべてを背負つ」となんて誰にも出来ないわ。罪をつぐなつこと
は必要だと思うけど、何もすべて一人でしなくてもいいんじやない
かしら?」

「え?」

織莉子は闇の広がる世界を窓越しに見つめた。

「どんな闇だつて照らす光があるわ。私たちの内面にある闇や傷だ
つて照らしてくれる光があるはず。もしその光を作り出すひとが出
来るとすればきっと彼ね」

千鶴はハツとした。

クロードの皿から送られる映像に映る決意に満ちた皿をした青年の
姿。

希望を捨てことなど決してしない そつ語る眼差しの持ち主。

「蒼井……彰」

その名を口にした瞬間、千鶴の胸が高鳴った。

クローデの胸が高鳴った。

（なんだ？）の感覚は……）

この状況は誰がどう見ても彰にひとつ絶望的でしかない。

にも関わらず彰の目には決意が宿つており、諦めとはまるで無縁だった。

（何か奥の手でも？その気配を私は感じ取つて震えてくるところの
ですか……）

クローデは三十近い魔獣がついているし、その中には魔法少女を
ベースにした亞種も数体いる。

いくら彰であつてもおひつとややつとじや潜り抜けられない。

それがわかつていても感じる。それは

「怖いのか？」

「……」

彰がクローデの心を読んだかのよつて言つた。

「云わつてくるよ。あなたの感情が……」

「感情……？」

「俺はどんものであのと心があると思つてる。それが例え魔女であれうと、田の前にての魔獸であれうと」

魔女に感情や意思などは無い。

ただ本能に従い、呪いを振りまくだけの存在でしかないのである。

「心があるから魔女だつて救える……」やう思つてゐるのですか？」

馬鹿馬鹿しい。

クロードは半ば呆れた感じでやう返した。

だが彰は

「思つてゐるよ

と眞面目に返事し、クロードは呆気に取られた。

「誰だつて心に傷を抱えているんだ。消える」との無い傷があるから心はまだなれないんだよ」

「何を言つているんですか……？」

「魔女や魔獸だつて同じさ。心の傷が足かせになつて、それが負の感情を生んで破壊衝動を引き起さす。でもそれって心がある証拠なんじやないかな？」

「それはあなたの思いに、理想に過ぎないのですよ。そんなのありまするわけが」

「あつえるよ。明奈の願い、思いが俺にそのことを教えてくれたんだ」

クロードは彰の話など耳に入っていなかつた。

彰に起きている異変に田を奪われたからだ。

「ハ、これは……？」

彰の背に虹色に輝く光の粒子がまるで意思を持つているかのように「ひ」めき合ひっていた。

そしてそれは次第に一つの形を作り上げた。

「翼……？」

一見すればそう見える。

だがその翼は本などで見る天使のそれとは遠くかけ離れた形状をしていた。

木の枝のように無造作に様々な大きさの管が分岐していた。

彰の背から生えるように展開されたそれは美しいといつも不気味だった。

「

だがクロードが今起きた異変の中で最も田を奪われたもの、それは彰の瞳だった。

彰の右瞳の色が黒から鮮やかな金色に変わっていたのだ。

どうしてこんなにも田を奪われてしまつのかわらなかつた。

もしもこの世に神様がいるのだとすれば、きっとこのようない揺るがない決意と慈愛に満ちた田をしてくるのだろう そういう二つの間にか考えていた。

彰が右腕を前に突き出した。

「さあ、教えてくれ……君たちの痛みを…」

その声と共に、彰の背にある翼がざわめいたのだった。

『痛みの翼』

彰はそう名付け、呼んでいる。

蒼井明奈が消滅する間際に、彰の『痛みを受け入れて救いたい』と
いう願いを受けて授けたものだ。

明奈が契約の際に願つたことは『彰の願いを叶えること』であり、
その願いが成就された結果生まれた。

まさに彰と明奈の二人の願いによつて生まれた力なのだ。

『痛みの翼』を構成している粒子の管は日にも留まらぬ速さで伸び
て行き、今この場にいるすべての魔獸に突き刺さつた。

魔獸たちはそれを引き抜こうとするが、すり抜けてしまい、掻むこ
とすら出来なかつた。

「蒼井彰！あなたは一体何を！？」

「痛みを『共有』する！」

彰は一度深呼吸し、自分を落ち着かせると首にかかつた鳥のガラス
細工を握り締めた。

覚悟を決めなくてはならない。

死する覚悟を。

『痛みの翼』は対象と彰の心を繋ぐデバイスのようなものだ。

人それぞれが持つ心の傷は本人すらわからなくなってしまつくらい
心の奥に眠つている。

その傷にはどんな言葉も届かない。

何せ本人すらわからない傷なのだ。

当然他の誰かがそれを知ることなどできない。

それが最大の問題なのだ。

知ることの出来ない傷は語る口も聞きいれる耳も持ち合わせていない。

それでも傷は求めているのだ。

自分がここにいるということを。

聞いて、知つて欲しいのだ。

受け入れて欲しいのだ。

いつまでも自分が原因で自由になれない傷の持ち主を見るのは嫌なのだ。

傷は、苦しみ、変貌し、行き場の無い呪いを振りまく主人を解放し

たいと願っているのだ。

ならば受け入れ、共有しよう。

心の傷から目を逸らしているから、持ち主はその傷に気付かない。

気付きたくないから逸らす。

結果としてなぜ自分がこんなに行き場の無い気持ちを抱いて、呪いを振る巻いているのかわからない。

ならば目を向け、理解しよう。

一人で出来ないなら一人で共有すればいい。

(俺がお前達の傷を一緒に共有するから……。だから傷を受け入れて自由になろう。もう行き場の無い呪いを振りまくのはやめにしよう)

これが『痛みの翼』の第一の能力。

本人ですら目を逸らしている傷を浮かび上がらせ、彰と共有することで傷を和らげる。

目を向けて欲しいと願う傷たちは浮かび上がったことで静かに消えてゆく。

本来心の傷として眠っていたそれは、消えることによって本人に安らぎと許されるんだという気持ちをとえる。

心の傷に向き合つこと、それは一度失った心に向き合つことに等しい。

再び己の心を知り、自分を取り戻し、そして解放される。

心を濁らせたもの、失つたものを理に導く。

そして『痛みの翼』の第二の能力。

共有した痛みを魔力に変えて翼が取り込む。

痛みは心。

心は魔力の源だ。

共有した傷という心を受け入れ、背負つことで翼の一部とするのだ。

今は小さくとも、受け入れた傷が多くなればいざれ巨大な力となるだろう。

もしまだワルブルギスの夜のように強大な敵が現れた時、翼に蓄えられたたくさんの人の心がそれらを打ち破るのかもしない。

消えていった者達の願いや希望を無駄にしたくない。

そういうた思いが生んだ力が『痛みの翼』なのだ。

しかしこの力は、云わば神の力と言つても過言ではない。

神がすべてを受け入れ、天国に導くようなものなのだ。

これは神という絶対的な存在だからこそ出来ることであり、影は所詮は人だ。

人が神の真似事をしようとなれば当然、それは訪れる。

天を貫くような叫びが彰の口から放たれた。

人という器に耐え切れなくなる。

そして訪れる
オーバーフローが。

「あ、彰さん！？」「

まどかは突然、胸を押さえて苦悶の表情を浮かべながら苦しむ彰に駆け寄った。

しかしそれを千里が止めた。

「今、しじょーに近寄っちゃ駄目ー。」

「で、でもー。」

「今、しじょーは『痛みの翼』を『コントロール出来てないのー近づいたらあの世につれてかれりやつよー。」

「訳がわからないよ……。一体何が起きているのー？」「

まどかと最後別れた後に手に入れた能力だ。

当然そのことを知らないまどかは今起きているこの事態にまったくついていけていなかった。

「マスターの『痛みの翼』は対象の持つ深層に眠る最も深い傷を共有し理解してあげることで魂を浄化して理……わかりやすく言えば天国に導く能力」

「でもその力と彰さんが苦しそうにしている関係って……？」

双樹の説明で大まかなことはわかった。

だが今なぜあんなにも彰が苦しんでいるのか、それがやはりわからなかつた。

「あんた、マジでわからないの？」

千里がイライラしながらため息をついた。

「傷となつた記憶を共有するんだよ？ 傷は人それぞれだけど、どれもその人が傷になつてしまふくらい嫌な事。田も背けたくなるような傷だつてあるんだよ。それを何十人分も見せられてるんだから、普通の人だつたらおかしくなるに決まつてるじやん！」

「そ、そんな！」

『痛みの翼』は諸刃の剣なのだ。

本来は魔女になつてしまい、救いの無い魔法少女たちのために生まれ出された魔法。

グリーフシードが手に入らず、魔文化するものもいるだろつ。

だが恐らく、それ以上に負の感情に支配されてソウルジエムを濁らしたがために魔文化する魔法少女のほつが多い。

なぜならそついた感情の爆発が起きた瞬間に生まれるエネルギーがインキュベーターたちにとつて『上質』なのだから。

だからこそ感情を持つ生命体を選んだのだ。

負の感情を持つて魔女化した魔法少女の傷は相手のものだらう。

魔女化するほどの傷を共有するとこり」とは、己自身も魔女化するリスクを背負わなくてはならない。

それはすなわち死を覚悟していなければ出来ない。

今、彰が相手にしているのは魔女ではない。

だが魔獣にされたという傷は大きいに違いない。

悔しさ、悲しさ、憎しみ。

ありとあらゆる負の感情を、彰は今一人で受け止めているのだ。

(そんなの……辛すぎるよー!)

まどかの瞳から涙があふれた。

まどかを助けたい その気持ちが今の彰を動かしている。

それを知っているからこその涙があふれた。

そして泣くことしか出来ない自分が情けなかつた。

「悔やむ……」とはないよ……まどかちゃん

「彰さん……」

「俺は、君たちに救われたんだ。あの時……ほむらちゃんが俺が間違っていることに気が付かせてくれた。そしてまどかちゃんとの約束が……俺に生きる希望を与えてくれた……」

肉体を傷つけられられているわけでも無いのに、見るからに衰弱しているのがわかつた。

「つーーー！」

彰の左手のひらに埋め込まれたソウルジエムが半分濁っていた。

「今度は俺が一人を助ける……番でしょ？」

彰は力なく笑つた。

「やめて……このままじゃ、彰さんが……」

彰は首を横に振つた。

「これは明奈との約束でもあるんだ。痛みを背負つた魔法少女たちを救うつてさ」

『痛みの翼』がさらに大きくなつた。

死を覚悟しても救いたいといつ彰の意思を受け取つたかのようだ。

時間にしてみれば五分と経つていい。

とても長いと感じたその瞬間が終わりを告げたとき、『痛みの翼』の消滅と共に、彰はその身を沈めた。

彰が目を覚ますと見渡す限り真っ暗な世界が広がっていた。

身体は横になつてしているのだが、背中が地にこりている感覺は無く、まるで海の中を漂つてゐるかのよつだつた。

（ううは……？）

確かに自分は『痛みの翼』を使用した。

そして『痛みの翼』を通して伝わる痛みに心が捻りつぶされそうになつた。

とても苦しくて、悲しかつた。

ただそれしかわからなかつた。

そのあと自分がどうなつたのか全くわからなかつた。

（死んだのかな？それとも魔女に？）

どちらにせよ、行き着く先が何も存在しない暗闇の世界ではあまりにも寂しいではないか。

『痛みの翼』で導かれた者たちは、せめて希望ある世界に行つてくれていたら良いのだけれど 彰はそう思つた。

彰は首にかかつてゐるはずの鳥のガラス細工があることを確認しよ

うと胸元を探つた。

そしてそれがあることを確認すると安堵の息を漏らした。

(あれ?)

ふとおかしなことに気が付いた。

(感覚がある……)

胸に触れたとき、確かに触れたという感覚があつた。

死んだ人間には五感といつものが存在しないと思つていたのだが……。

(身体はただの入れ物で、実際に感じるのはソウルジエムつまり魂だつたよな……。ソウルジエムも手元にあるし、死んで魂だけになつても魔法少女は魔法少女のままなのかな?)

彰は身体を起こして立ち上がつた。

こんな上も下もないような世界で『立ち上がる』といつのも変な話だが。

とりあえず辺りを見回してみた。

「あれは……?」

遠くに光が見えた。

「この真つ暗な世界においてその光は希望に見えた。

（希望……か。もしかしたら三途の川の向こうから手招きする死神
だったりしてな）

苦笑しつつも、その光しか手がかりない今の状況ではそれにすがる
しかなかつた。

歩を進めるが、地面を踏んでいる感覚が無いため本当に進んでいる
のかわからない。

だが着々と光に近づいているため、とりあえず進んでいるのは確か
なようだ。

光は段々と大きくなり、そしてそこに何があるのかが見えてきた。

「これって……鳥かご」……？

それはとてつもなく大きな鳥かごだった。

一周するのに一時間はかかりそうだ。

「あの世にしては洒落てるなあ」

彰は鳥かごに近づき、魔力で強化した目で格子越しにかごの中を覗
いてみた。

「……」

見開いた目と開いた口が塞がらなかつた。

鳥かごの中央には椅子がポツンと一つ置かれており、そこには少女が座っていた。

穏やかな波のようにゆらゆらと長い髪を泳がせ、光を纏つた純白のドレスを着ていた。

女の子というには失礼かと思つてしまつほど神々しく、その様はまさに女神だった。

しかし彰が驚いたのはその神々しさにでは無かつた。

その子の顔が彰の知つてゐる人物にあまりにも似ていたのだ。

「ま、まどかちゃん……？」

思わず口から漏れていた。

椅子に座つた女の子は彰の声に反応し、驚きの表情を浮かべた。

女の子は立ち上がると突然音も無く消えた。

そして消えた時同様、突然彰の前に現れた。

「――」

突然のことにより彰は言葉を失つた。

強化した目で見ていたから近くにいるように見えていたわけであり、実際は歩いて近づけば數十分はかかる。

それを一瞬で近づいて見せた。

それはこの女の子には距離や時間という概念がまるで関係ない自分が概念そのものだからと言わんばかりだった。

「どうして」「……？」

「やつぱりその声……まどかちゃんのか？」

彰がそつまつと、女の子は困った顔をした。

「あなたは……？」

「……」

確かにまどかの顔をしているが、自分が知っているまどかでは無いそつ彰は悟った。

「俺は蒼井彰……。気付いたらここにいたんだ」

「あなたが彰さん……？」

「俺を知ってるの？」

女の子は優しい笑顔で微笑んで頷いた。

「たくさん彰さんのこと聞かされたから。聞いたとおり、すごく優しそうな人……」

「君はその……『まじか』か『まんなのか』？」

「彰さんの知ってる私とは違う私。でも本物なら一つになるはずだつた私なんだよ」

「どういって……」

『まじか』が彰の手を包み込んだ。

たくさん聞きたいことはあるはずなのに、その手が暖かくあまりに心地がよかつたたせいかどうでもよくなつてしまつていた。

包み込まれた手の隙間から黒いもやが蒸氣のよつよつと上がつていた。

（俺のソウルジムが浄化されたるー。）

本来グリーフシードでしか出来なことを、Iの『まじか』は顔色一つ変えずにやつてのけた。

彰のソウルジムを浄化し終わると、『まじか』は手を離した。

「Iは彰さんの匂のべも場所じやないよ」

「え？」

「それって……」

なぜかIの前にいる『まじか』がとても優しく見て、もう一度と言えないのではないかと思えて、彰は思わず手を伸ばした。

だがそれは叶わず、彰の身体は動かなくなっていた。

「まだ」「こに来るには早いよ」

突然、背後から声がした。

(「の声……嘘……だろ?」)

視界が揺らいでだんだんと田の前が真っ白になつていった。

「どかが悲しそうにしている『まどか』。

そして格子越しに『まどか』の隣に立つもう一人の少女、それは

「 つーー。」

既に言葉を発することが出来ず、少女の名を口に出来ぬまま、彰は再び暗闇へと沈んでいった。

「じいじが遠くから声が聞こえてきた。

次第にその声は大きくなり、それが自分の名を呼んでいるのだと彰はようやく認識できた。

「彰さん……」

「おじい……わやん？」

朦朧とする意識の中、自分の「じいじ」を泣き崩れた顔で見下すまじかを見た。

（ああ……俺、気を失つたのか。何か夢を見ていたよくな……。
でも何にも思い出せない）

思つ出せうとしてもまるで力がギをかけられてしまつたかのよひい、
記憶を戻せ玉すじじとは出来なかつた。

しかし田の前で安堵の笑顔を浮かべるまじかを田の頭たつにして、
彰は夢のじいじなどじいじでも良くなつた。

「やっぱ笑つてこむほつが可愛じよ」

「そんな[冗談ばつかり]言つて……心配したんだよ……」

「じいじ、じめん」

彰はなんとか自力で立ち上がると、クローデのまつ毛を直った。

「俺はどれくらい氣を失つてた?」

「一分くらいです」

双樹がそう答えた。

双樹と千里は、彰とまどかの前に壁になるよつこにして立つていた。辺りに魔獸の姿はなく、どうやらすべて淨化することに成功したようだ。

（つて言つても、あまり状況は変わらないか……）

魔獸は居なくなつたが、彰の身体は満身創痍で戦つことなどほとんど出来ない。

（（（）は俺を囮にしてでも逃げる……。それしかない！）

この考えを既に言えれば当然反対されるだらう。

だから彰は自身の内の中で決意を固め、人知れず拳を握り締めた。

（（（）が……）

30体近くいたはずの魔獸が一つ残らず消え去つたこの現状にさす

がのクロードも動搖を隠せなかつた。

彰がどのような魔法を使い、どのようにして魔獣を消し去つたのか、クロードには何が起こつたのかまったく理解出来なかつた。

（こんな魔法があつて良いのですか？）こんなまるで神の所業……。先ほど蒼井彰の仲間が『傷となつた記憶を共有する』と言つていた。それが本当だとしたら、蒼井彰は化け物……！

痛みを共有するといつては相手の辛い出来事を共有するといつてだ。

普通の魔法少女ならソウルジエムが真つ黒になり、魔文化してもおかしくない。

にも関わらず、彰は30体近くの魔獣たちの痛みを共有し、クロードの前に立つてゐる。

（精神力の強さも異常だが、それをやつてのける魔力のキャラシティも恐ろしい。一体何者なのですか、あなたは？）

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべたが、すぐに笑みへと変わつた。

（しかしこちらが有利な変わりません。このまま一気に終わらせて勝利を手にするのです）

まだかさえ生きていればいい。

その前提で行けば、他の者に容赦する必要は無い。

弱っている彰とほむら。

戦闘力皆無の千里。

唯一戦える双樹にさえ氣をつければ戦闘力の低いクロードでも充分に戦えるはずだ。

（色々イレギュラーが起きましたが、今度こそ終わりですー。）

クロードが戦闘体勢を取る。

クロードそして彰。

二人の決意が揃つた時、それぞれにとつて意外な展開が前触れもなく訪れた。

鷺宮千鶴はクロード越しに見える蒼井彰の力を田の当たりにして言葉を失つた。

「はは……」

自然と乾いた笑いがこぼれた。

「希望つて信じる者には応えてくれるんですね」

千鶴の人生は諦めばかりだった。

自分といつ存在が何のためにあるのか？

その答えを求めていた。

だが目の前に壁があればすぐに折り返し、前に進むことをやめいた。

父の時もそうだ。

勇気が無かつたんじゃない。

鷺宮千鶴という人間が意味もなく失われてしまうのを怖かつたのだ。

希望など一度も抱いたことなど無かつた。

もし彰のように希望を信じることが出来れば、恐れを断ち切り救え

る者もあつたかもしれないのに。

今もある人の助けにならうと決めていたはずなのに、諦めかけていた。

（彼が私に希望をくれた。ならやつぱり私も果たさなくちゃ……）

千鶴は窓のから窓に浮かぶ月を見た。

あの時もこんな夜だつた。

「織莉子さん……。私の役目は伝えることなんですね」

「千鶴さん？」

「私たちは運命の奴隸……逆らうことなんて出来ない。でも奴隸だつて王にさわやかな抵抗くらい出来ます。いざれそれは大きな亀裂となる」

「それが伝えること……？」

「やうです。言つなら、私たちにはそれしか出来ないんですね」

「これから織莉子に伝えることは、千鶴も伝えられたことだ。

少しずつ、そして確実にそれを伝えていかなければならない。

それは千鶴が魔法少女になつて少し経つたころに聞いた話。

千鶴にとつて運命を変えた出会い。

物語はワルブルギスの夜が現れる少し前にさかのぼる。

千鶴は父が手を汚していたことを知った。

それを千鶴に教えたのは織莉子の父だった。

織莉子の父は汚職のことを公表すると伝えに来たのだ。

「千鶴ちゃん。私がここのことを君に伝えたのは、君の言葉ならお父さんを説得出来るかもしれないと思ったからだ。私は既に告発するための材料は揃えている。つまりいつでも行動を起こせるということだ。だがそうすること一番苦しむのは君だ。だから私は事を起こす前に、君に希望を託したい」

そう言われたが千鶴は動くことが出来なかつた。

父は千鶴をとても可愛がつてくれていた。

千鶴が小さいときに母を亡くして以来、ずっと父は屋敷のものにほとんど手を借りることなく育ってくれた。

どんなに手を汚してもようと千鶴にとつては大好きな父親なのだ。

千鶴という存在を認めてくれるのは父しか居ない。

父を失えば千鶴は自分を失うことになる。

それが怖くてたまらなかつた。

「お譲様は旦那様を大切に思われているのですね。なら、そのお心をそのままにしておいてください」

悩む千鶴にそう言つたのはクロードだった。

そしてクロードは千鶴に代わつて千鶴の父を告発した。

だが追い詰められ、精神を害した千鶴の父により道づれとしてクロードは殺害されてしまった。

その後、織莉子の父の死の原因が千鶴の父であることを知った。

あの時、もし自分が父を説得していれば死人が出ることとは無かつたかもしぬれない。

何ひとつ自分で決断することもできず、他人任せの人生。

織莉子の父を死なせ、クロードと自分の父を失つた瞬間、千鶴は自分と言う存在を失つた。

自分を失つた瞬間、千鶴は自分を殺した。

* * * * *

「そうして君は自殺を図つた。でも結局死ぬことは出来なかつた」

目の前で表情を変えずにそう言つのは、まるでぬいぐるみのようなく形容姿をした不思議な生物だった。

「そんな私を笑いに来たの……キュウベえは？」

「とんでもない。ボクは君の才能を生かしに来たんだ」

「才能……？」

「やつれ。君は魔法少女の才能があるんだ！」

魔法少女となつて魔法少女という怪物と戦う代わりにどんな願いも叶えてくれる。

それがキュウベえが語つた大まかな魔法少女についての話だ。

「こんな私にも魔法少女になる才能があるの？」

「もちろんさ。才能さえあれば君の肉体がこん睡状態に陥つていようつと契約できる。心さえ生きていれば問題ないんだ」

「……」

現実から背を向けるため、自らの死を選んだにも関わらず、結局それすら出来なかつた。

こんな中途半端な存在でしかない自分が魔法少女になることで何かできるのだろうか。

「ああ、どんな願いでも叶えてあげる。言つてみるとこいつー。」

「わ、私は……し、知りたい」

「ん？」

「私は、私自身の存在理由を知りたい！」

キュウベえは表情を変えずに千鶴を見つめた。

なんとなくキュウベえが何かを言いたげにしているような気がした。

「 確か君は織莉子と知り合いだったね」

「え？」

「いや……君の願いと、織莉子の願いがとても似ているものだから、ちょっと驚いたのさ」

「織莉子さんが……？」

織莉子が魔法少女であることにも驚いたが、織莉子も自分の存在価値を見いだせずに居たことに驚いた。

織莉子は千鶴にとつてただ一人わかり合える友人だった。

同時に羨ましくも思っていた。

千鶴から見た織莉子はすべてを持つた理想の人間像だったからだ。

理想にしていた織莉子は、自分と同じ悩みを抱えていた。

意外だったが、なんだか嬉しく感じた。

「千鶴。願いはそれでいいのかい？」

千鶴は頷いた。

織莉子は今も己の存在証明を探しているのだろう。

ならば自分も、自分自身の生れる意味を見出してみよ。

千鶴はじつて魔法少女になれたのだ。

千鶴はキュウベえと契約したことで魔法少女となつた。

「願いは叶つた。きっと君がこれから進む先に君の追い求めているものが見つかるはずだよ」

キュウベえはそう言い残して千鶴の意識の中から消えた。

当然、存在証明といった曖昧なものは形として手にする」とは出来ない。

自らそれに出会い、そしてものにしなければ意味が無いのだ。

キュウベえはあくまで追い求める先を用意してくれただけで、そこまで行くのは自分の力なのだ。

千鶴は魔法で動けない自分の分身として、亡くなつたクロードを作り出した。

作り出されたクロードは『生きる意味、存在証明を探す』というプログラムを元に自律行動をした。

千鶴は自律行動するクロードの手を通して今、刻々と進んでいく現実を夢に見た。

それで千鶴は知る。

屋敷の人間をはじめ、学校の人間、かつて父の知り合いや部下だつ

た者たち。

それらの人間が、千鶴のことを忘れていたり、蔑んだりしていることを。

自分の存在価値を知るために手にした力が、逆に自身の無価値感を助長してしまっていた。

（私のような人間が、希望を求めることが間違いだつたんだ……）

千鶴はしゃがみこむと、体育座りをして顔をうずめた。

（もう何も視たくない……。聞きたくない）

再び真っ暗な世界に閉じこもるつとしたとき、その手は突然差し伸べられた。

「アナタ……ずいぶん後ろ向きなのね」

「え？」

顔をあげるといつの間にか見知らぬ場所に居た。

一言で言つなれば、そこは『図書館』だつた。

「そ、そんな……。いつの間に?それより私の中なに……」

動搖する中、先ほど自分に対して言葉を投げかけた人がいることを思い出した。

「あ、あなたがここにっ。」

椅子に腰掛けた、自分より少し年上風の女性だった。

「ちょっと違うわね。アナタの世界の中に一時的に私の世界を作らせて貰つていいのよ」

「そんなこと……」

「そんなこと魔法少女でもない限り そう思った時、改めてこの人が千鶴と同じ魔法少女であることに気が付いた。」

「記憶と心つて似てこると思わないかしら~ビビりも田に見えないものだし、喜びや悲しみとかを刻み込むのも記憶や心だわ」

「ビビり…… じですか?」

「似ているものだから、記憶と心は繋がれるのよ。アナタがワタシを記憶していたから、ワタシはアナタの中に居られるの。それがワタシの魔法……」

「でも私はあなたとは初対面のはず……」

「思ひ出せないと思つわ。アナタ、とても小さかったもの」

「小さことわ~。」

「さう……。アナタは小さことに魔女に襲われた。その時、アナ

タはお母さんを「へしたのよ」

「母を……？」

母親は原因不明の事故で亡くなつたと父から聞いていた。

魔女が原因であれば、魔法少女でない者から見れば『原因不明』で済ませてしまつだろ？

「アナタを助けたのがワタシの仲間だったのだけど、助けたアナタはお母さんを亡くした痛みで壊れてしまいそうだったの。だからワタシがその時の記憶を消したのよ」

母親の記憶はほとんど無い。

写真で母親の顔を見てもピント来ないくらいだ。

「アナタに母親の記憶を残してしまえば、それをきっかけに消した記憶が戻つてしまふかもしない。いくらその時の記憶を消しても、アナタの心から消えることは無い。それが記憶といつものだから。とは言え……とても申し訳ないことをしたわ」

女性はため息をついた。

「私は……母のことをどう思つていたのですか？」

なんとなく氣になつた。

記憶を消されていたため、千鶴は母親といつ存在を知らずに育つた。

父親のように千鶴を愛してくれていたのだろうか。

「やうね……。アナタのお母さんは身体の弱い人だったわ。でも心の強い人だった。アナタのことを一番に思い、アナタに強く生きて欲しいと願っていたわ」

女性は記憶と心は似ている 繋がっていると言っていた。

今語っていることも、母親の記憶から感じ取ったことなのだろう。

「わ、私は母のことをどう思っていたんですか？」

無くしてしまった母親への思いを知りたかった。

父はたまに「自分よりずっと強い人で、私はそんな母さんのようにお前になつて貰いたい」と言っていた。

しかし母親のことを知らない千鶴にはそれが理解できなかつた。

だが、もし今母親への思いを知ることが出来れば、父の言葉の意味がわかるかもしれないと思つた。

「アナタは……大好きなお母さんを守りたいと思っていたわ。お母さんが苦しまずに寢らせる幸せな世界を作りたいと」

「うう……ううー。」

千鶴の瞳から涙のように涙が流れ落ちた。

千鶴はずつと前から自分が生きる意味を知つていた。

周りがどう言おうと関係ない。

立派に貫ける信念があったのだ。

母親と父親は千鶴に強く生きて欲しいと願った。

そして千鶴は願いを知らずともしつかり受け取り、強くあらうとしていた。

「アナタは無価値なんかじゃないのよ。志のあること自体に価値がある。それさえわかつていれば残せるはず……アナタの存在証明を女性はこじれることを伝えてきたのだ。

確かに願いは叶った。

千鶴のはじめの存在理由を知ることが出来たのだ。

「あの……アナタの名前は？」

女性は微笑みを浮かべ、答えた。

「自己紹介が遅れたわね。ワタシの名前は、叶ゆかりよ

これが千鶴の運命を変えた出会いだった。

3日目？（後書き）

この回の回想で登場した叶ゆかりは私の書いた過去作品「間奏？」のオリジナルキャラです。もし良かつたらそちらも見ていただけるとちょっとは足しになるかもしれません。

「アナタにお願いがあるの」

叶ゆかりは突然そう言った。

現実の世界では、ある魔法少女たちがワルブルギスの夜という強大な魔女を倒したという噂が流れていた。

「お願い……ですか？」

「アナタ、最近奇妙な存在に出会ったでしょ？」

漠然とした問い合わせたが、心当たりがあった。

「もしかして、自分を『概念』だと名乗った人のことですか？」

正確には、出会ったのは自立活動しているクロードだ。

クロードの前に現れた『それ』は人と言つには抵抗があるような存在だった。

「何というか……運命つてものなかしらね。アナタには無縁のことがだと思っていたのだけど……」

ゆかりは一人で納得していた。

千鶴が首を傾げていると、ゆかりは苦笑を浮かべて謝った。

「実は私のお願ひとその『概念』はとても関係があるの」

ゆかりは神妙な顔つきで千鶴を見つめた。

千鶴も気楽な気持ちで聞いていい話ではないと悟った。

「ワタシはワタシという存在を残したくて出会った人の記憶にワタシを刻み込んできた。でもそれはあくまでこの世界といつものがあつて初めて成り立つものなのよね」

ゆかりの言い方は一言で言つなら『変』だった。

まるでこの世界の存在があやふやだと言つているかのようだつたらだ。

「誰も変だとは思わない。だつて思えるはずがないもの。この世界で産まれ、生きて……そして死ぬ。それが当たり前だから。もちろんワタシもそう思つていたわ。あの人に会つまではね」

「あの人？」

「どんな人なのか……なんて名前なのか……それを言つことは出来ないの。それを知られるわけにはいかない。でも伝えなくてはいけないのよ。遠回りしても、時間がかかるてもいい。あの『概念』に知られることが無く、目的の人にな……」

千鶴は生睡を飲み込んだ。

とてつもなく重大なことをゆかりは伝えようとしている。

しかも自分に。

「アナタはとても遠い位置で『鹿田まどか』と繋がっている。それは『概念』も知っていることだけ、アナタは知らない」

鹿田まどか。
かなめ

その名を聞いたのはその『概念』からが初めてだった。

強大な力を秘めた子で、もし魔法少女にすることが出来たなら、その力を利用して千鶴を昏睡状態から目覚めさせることが出来るかもしない。

そうクロードに語つていた。

「『概念』はアナタ……正確にはクロードさんを鹿田さんにぶつけてその力を手にしようとしている。『概念』がそう考えたのは、アナタ自身は知らないけれども少なからず鹿田さんと関係性があると、いう微妙な立ち位置に居たから。それが『概念』にとっては好都合だつたし、ワタシたちにとつてもチャンスとなつた」

まどかと親密な関係にある者を誘惑しても意味がない。

まどかを擁護しようとするからだ。

だがまったく関わりが無ければ何かと不便なものだ。

一人でも対象のことを知る人物いるだけで、情報を得ることが出来たり、時として共に戦う仲間となってくれることもある。

そういう意味で千鶴は丁度良い立ち位置にいたのだ。

「アナタが鹿田さんのことと『概念』のことを知ったこと。そしてやはりアナタがどちらからも遠い位置にいること。それがワタシたちひとつでも好都合なの」

「あの……『概念』って何なんですか？ゆかりさん言い方だとまるで」

倒すべき相手、つまり敵だと言つていいやつだつた。

ゆかりは千鶴の考えていることを悟つてこよつたが、否定することはしなかつた。

「『概念』のことも話さなくてはいけないわね」

ゆかりは魔法で2つの人形を作り出した。

「これから始まるのは一人の女の子の絶望、希望、創造……そして果て無き戦いの物語よ」

一つはピンクの髪の毛を左右で縛つた可愛らしさ。

もう一つは黒髪が綺麗でどこか儚げな感じの魔法少女。

「ピンクの髪の毛の子が鹿田まどかさん。
黒髪の子が暁美ほむらさん。
かなめ
あけみ

ゆかりが一人の自己紹介を済ませると同時に、テーブルの上に見
瀧原市を模したジオラマが出現した。

そのジオラマの上空を魔女が浮いていた。

ほむらの人形がひとりでに動き出し、ワルプルギスの夜と戦つてい
る。

だが。

「あつ！」

千鶴の目の前でほむらはワルプルギスの夜にやられてしまった。

「何度やつても暁美さんは勝てなかつた。でもそんな暁美さんの前に、この時間軸の鹿目さんが現れたの。鹿目さんは大切な仲間の死、

そして自分のためと一生懸命に戦う暁美さんを見てある願いを叶えようと考えていた」

ほむらとまどかの前に、今度はキュウベえの人形が現れた。

「その願いは『すべての過去、未来の魔女を消し去ること』。そうすることで魔文化して呪いを振りまく存在となってしまう魔法少女たちを救おうとしたのよ」

「でもそんなす」」願い……叶えることができるんですか？」

「鹿目さんになら出来たのよ。言い換えるなら鹿目さんにしか出来なかつた。暁美さんが繰り返し続けた時間の中で因果の特異点となり、強大な力を蓄え続けた鹿目さんにしかね」

まどかが魔法少女へと変身し、放つた無数の矢によりワルブルギスの夜が消し去られた。

「『』の願いを叶えるためには時間という概念に囚われない、上位の存在つまり概念そのものになるしかなかつた。それは鹿目さんの存在そのものを過去、現在、そして未来から消し去つてしまうこと意味していたわ」

まどかは女神と言つても相違ない神々しい姿へとその身を変えた。

「これですべてが終わつたはずだつた。でもそつもいかなかつた」

まどかの後ろに全身真つ黒に染めたもう一人のまどかが現れた。

「希望と絶望は表裏一体。希望が振りまかれれば絶望も同じように

生まれる。鹿田さんが希望そのものだとすれば、この黒い鹿田さんは絶望そのもの」

まどかとこつ希望が生まれたと同時に絶望も生まれてきた。

それは至極当然のこととでコインに表と裏があるように、世界は常に同じになるようにバランスを取り続けている。

「鹿田さんを慈悲の女神とするならば、この黒いのは無慈悲なる悪魔。この悪魔こそ、ワタシたちが倒すべき『概念』なの」

「でもそれってつまり……相手は神様みたいなものなんですね？」

まどかと『無慈悲なる悪魔』は元々同じ存在。

つまり一人の力は同じ。

その力は拮抗しあい、勝負がつくことは無かった。

「ワタシたちでは到底勝つことなんて出来ない。でもある人は唯一太刀打ちできる術を持つていてる……。その人にある人物を引き合わせることがワタシたちの役目なの」

戦う力は無くとも、伝えることなら出来る。

それがゆかりの、そしてこの話を聞いた千鶴の役目なのだ。

「『無慈悲なる悪魔』は拮抗状態を打破するための策にでたの」

「それが……この時間軸のまどかさんの力を奪うこと……？」

同じ力を持っているがゆえに決着のつかない戦い。

ならばこの状態を崩すためには、それより大きな力を手にすればいい。

単純だが確実な策であった。

「そう……。そのために『無慈悲なる悪魔』は改変されるはずだった一つの並行世界を密かに自分の手中に収めた」

「IJの世界が…？」

ゆかりは頷いた。

語っている自分ですから、まるで御伽噺を話しているようだとゆかりは思っていた。

「手中に収めたこの世界を『無慈悲なる悪魔』は、女神となつた鹿目さんから見た最も幸せな世界に作り上げた。仲間が死ぬことなくワルブルギスの夜を倒し、そして皆で幸せな生活を送る。鹿田さんが目指した楽園……」

このとき、ゆかりは『無慈悲なる悪魔』がそのような世界を作った理由がまどかを油断させて何かした身動きを取れない状態に陥らせることだと推測した。

その推測は後に見事に当たつてしまつ。

『無慈悲なる悪魔』の手によって、まどかは力の及ぶこと無い概念

世界の奥の奥に閉じ込められてしまったのだ。

「本来『概念体』はワタシたちよりも上位層に存在する姿無きもの。だからワタシたちは視認出来ないしそれらの声を聞くことなんて出来ないの。『概念体』も直接的な干渉できない……。でも『無慈悲なる悪魔』の恐ろしいところはその弱点を克服しているところにあるのよ」

千鶴は改めて気付いた。

クロードに接触してきた『無慈悲なる悪魔』は確かにクロードと話をしていた。

ぼんやりだが何となくセレに面する とこの感覚もあった。

千鶴たちは認識出来ないはずの存在を認識していたのだ。

「『無慈悲なる悪魔』は女神となつたまどかさんのよう、魔法少女たちを救うといつ力を持ち合わせていない。その代わりにワタシたちに干渉できる力を持つてこるの」

「それじゃあ、私たちの話だつて知られてしまつんぢや……」

ビリにも話なくビリにでも話る存在。

そう『無慈悲なる悪魔』は言つていた。

その通り、『無慈悲なる悪魔』はこの世界には居ないが、上位の世界から千鶴たちすべてを見通すことが出来る つまりここで居るよつにすべてを捉えられるのだ。

「そうね……本来ならね」

「本来……なら?」

「あらゆるものを見通せる目がありながら、その上でワタシたちに直接干渉できる……だとすればもう太刀打ち出来ないわね。でもそうじゃないの。『無慈悲なる悪魔』はこの世界に実体化しているときは、あくまでこの世界に存在するもの。つまりすべてを見通す目を持つていな」のよ

「でも確かに『ビ』にも届なくてビ『』でも届く存在だ」って言つてましたよ?」

ゆかりは「ふふ」と声に出して笑つた。

「ハッタリよ

「は、ハッタリ!?

「そう。でも相手をよく知らない状態でそう言われたらそれが出来るような気がするでしょ?ワタシたち魔法少女だって初対面では力の探りあいですものね」

初めて会つ相手に対しては、いかに自分を大きく見せてプレッシャーを『』えるかが勝負になつてくる。

昆虫や動物はそのようにして相手に威圧をかけたりするところ。

「だからワタシたちは相手の田を盗んで打ち勝つための作戦を着々

と進められる。だからと言ひて油断は出来ない……。ばれてしまえば圧倒的な力の前にすべて無に返すことになるわね

「でも……なぜ『無慈悲なる悪魔』はこんな面倒なことをしたんでしょうか？それほどの力があるのならいくらでも方法があった気がするのですけど……」

インキュベーターたちのようにエネルギーを集める方法はいくらでもあるはずだ。

いちいち新しい世界を作つてまどかが契約するのを待つなど、遠回りに思えた。

「ちよっとやそっとのエネルギーじゃ拮抗したバランスは崩せないわ。だから手っ取り早いのは自分と同じ力をもつた鹿田さんをもう一度魔法少女にしてその力を奪うこと」

まどかの願いによつてすべての平行世界上のまどかは一つとなつて神となつた。

そしてまどかの願いを理とした世界が新たに生み出された。

再びまどかを契約せるためには、この理の外に出なければならぬい。

そのため、『無慈悲なる悪魔』は改变される前の並行世界を抜き出したのだ。

これによつまどかの作り出した理に囚われない新しい世界が誕生した。

『無慈悲なる悪魔』が作り出したこの世界に対してもどかに干渉されでは困る。

そこで『無慈悲なる悪魔』はまどかを封じることで身動きの取れない状態にした。

「でもね……『無慈悲なる悪魔』がこの方法を取らざる終えなかつた最大の理由はある魔法少女の存在だったのよ」

「ある魔法少女……それがゆかりさんにこのことを伝えた人……？」

「そうよ。その人は『無慈悲なる悪魔』を倒せる可能性を秘めていた。その人の力をこれ以上大きくしないためにはこの方法を取るしかなかつたの。『無慈悲なる悪魔』はその人を遠ざけることに成功したと思った。でも……ある偶然によつてその人はこの世界と繋がることが出来たのよ」

「ある偶然……？」

「本来、存在しないはずの人間がこの世界において存在している。でもそれは無数にある可能性から考えればありえない事ではないの。ワタシが産まれてくる世界、その逆の世界……それぞれがあるようだ。だから『無慈悲なる悪魔』はその偶然 イレギュラーに気付かなかつた」

「その魔法少女に会わせたい人つていうのが、その本来存在しない人……なんですね？」

ゆかりは頷くと、テーブルに展開したジオラマ上からまどかとほむ

らの人形を消した。

「その魔法少女はすべてを知っているから」の偽りの世界においても真実の目を失わなかつた。ゆえに分身ともいえるその人に繋がることが出来たの。でも分身のほうはこの世界の真実を知らないために、その魔法少女のことを知りえずにして。だから……」

ジオラマ上にわざと消滅したはずのワルブルギスの夜が再び現れた。

「その魔法少女に引き合わせるために、この世界で生じている矛盾をその分身に教える必要があるのよ。今まで見えていなかつたものも、認識一つで見えてくる。うまく行けば真実に手が届く可能性があるわ」

「矛盾……？」

「アナタ、ワルブルギスの夜を倒したって噂を聞いているわよね？」

「え？ は、はい……」

ゆかりはジオラマ上に浮かぶワルブルギスの夜を見つめた。

「ワルブルギスの夜を倒した子たちの記憶に刻み込んだ『ワタシ』が、確かに倒された瞬間を『見て』いるわ……」

記憶として生きるゆかりは、刻み込まれたゆかりたちの記憶を共有している。

かつて出合つた、まどかとほむらの記憶にゆかり自身を刻み込んでいた。

刻み込まれたゆかりはまどかとほむらの記憶を見て、ワルブルギスの夜の最後を確かに『視た』。

それゆえに今から口にする言葉に違和感を感じずにはいられなかつた。

「この時間軸のワルブルギスの夜は……倒されていないのよ」

「え？」

「倒す、倒さないの問題じゃないわ……。そもそも現れてしまう居ない！」

記憶は嘘を語らない。

そう信じていたゆかりは、『無慈悲なる魔』が作り出した記憶に騙されていた。

その悔しさにゆかりは唇を強くかみ締めた。

そんなゆかりをあざ笑うかのように、ジオラマ上に浮かぶワルブルギスの夜は不快な笑い声をあげていた。

3日目？（後書き）

色々突っ込みどころの多い話ですが、あくまで独自解釈のファンタジーとして捉えてくださいまし。

「これが私が聞いた話です」

千鶴は一息ついた。

織莉子は高鳴る心臓の鼓動に思わず表情を歪めた。

（まさかこんな所であなたのことを聞くことになるとは思わなかつた……ゆかりさん）

織莉子はゆかりの最後を予知し、それを伝えた。

（このときのゆかりはまだ『真実』を知らなかつたはずだ。

恐らく出会つた人にゆかりの記憶を刻み込んだのは、親友である天音リンのためだつたのだろう。

だが『真実』を知つたゆかりはその力を生かしてたつた一人で来るべき日を待ち続けた。

（さすがは記憶の魔女の異名を持つた人だわ。頭が下がるわね……）

織莉子は力なく笑つた。

高鳴る鼓動は止まらない。

その理由はわかっている。

「なぜ今の話を私に？」

「それは織莉子が既にこの世界の矛盾に気付いているはずだからですよ」

「……」

織莉子は内心、「やつぱつそーか」と思つた。

ゆかりはそのことでもえ予想しており、千鶴に伝えるべき相手として選出していたのだ。

「ええ。ワルブルギスの夜が倒されていないことを知つていたわ。覗えてしまつたから」

未来を予知する能力者であることをゆかりは知つていた。

ゆえにこの矛盾を予知するであろうと推測したのだ。

（ゆかりさんと最後会つた時は、まだワルブルギスの夜に暁美ほむらたちが敗北するといつ予知だつた。ゆかりさんも私から聞いてそれは知つていたはず……。だとすれば　　）

ゆかりは死後、記憶だけの存在になつてから恐らく『ある魔法少女』に出会つた。

その時聞いた話から、ワルブルギスの夜が現れないと予想していた。

その理由は簡単だ。

女神となつたまどかを陥れるという目的の一環でもあつたのだらつが、一番はこの時間軸のまどかに死なれないためだ。

まどかがワルブルギスの夜と遭遇して生き残つたケースは無い。

それはほむらがループし続けていたといつ事実からも明白だ。

ゆえに『無慈悲なる悪魔』はワルブルギスの夜を遠ざける方法をとつたのだ。

本来なら起じるはずだったワルブルギスの夜の到来。

それが『無慈悲なる悪魔』の手によつて捻じ曲げられゆつとしているが、それによつて一度視た予知が改变されると推測するには容易だ。

ゆかりはそのことから織莉子がこの矛盾に気がつくであらうと推測し、千鶴に織莉子に託すように伝えたのだらう。

（『』まで先を見通していのかしらね……。私よりよつぱり予知能力者が様になつてゐるわ……）

だがこの矛盾に気がついてしまつた以上、こずれどのよつな形にせよ何かが起こると覚悟はしていた。

「それで私は『』と誰に伝へればいいの？」

「ゆかりさんは、『ある魔法少女』の記憶を持つてゐる『』といったわ。それを見せることが伝達者としての最終的な目標だと」

「ならゆかりさんには会う必要があるわね」

ゆかりは人の記憶を本にする能力がある。

そしてその本を対象者に見せることで持ち主の記憶を刻むことができる。

だがそれが出来るのは無論ゆかりだけである。

「ゆかりさんはどこかに自分自身を刻んでいるのね？」

記憶は人以外にも、場所や物に自身の記憶を刻み込むことが出来た。

ゆかりが出会ったもの全てが、ゆかりにとつては刻みたい記憶なのだ。

「ゆかりさんの能力はある意味、肉体を失つてもなお生き続けることの出来る無敵の能力。でもそれはそう思えるだけで実際は違うと……。ありとあらゆる場所に記憶を刻むことで存在できるけど、それはあくまで記憶のカケラだから存在 자체はとてもあやふやでいつ消えてもおかしくないらしいんです」

千鶴はそれを噂話に例えた。

語られているうちには人々の中に生き続けるが、語られなくなってしまうば噂は人知れず消えてしまつ。

そういうあるか無いかわからないものはいずれ消えてしまつ運命なのだ。

「ゆかりさんはやついた記憶たちを繋ぎとめるブレインが居ると
言つていました。もつとも強く刻み込まれたその場所にそれは存在
すると」

「もつとも強く刻み込まれた場所……？」

織莉子がやつ問ひと、千鶴は首を振つた。

「教えて貰つていりませんです。ゆかりさんはとても注意深い人でし
たから……情報を分散して敵に気付かれないようにしておるみたい
です」

「それじゃあ、どうしてやむかわからぬ……」

「ゆかりさんはやついました。鹿田さんの記憶に本と共に刻
み込んだって……。そのカギは……もつ渡してあります」

織莉子はそれがすぐにクローデ経由で渡された千鶴からの手紙だと
悟つた。

だがその内容にはカギとなるようなものは書かれていたはず
だ。

「ゆかりさんがしたように私も注意深くやらないとけませんから。
その手紙、ある条件を満たすと魔法で書かれた文章が浮かび上がる
ようになつておるんです」

「なるほどね。それならやつ簡単にはやれない。それで条件つけて？」

千鶴は微笑んだ。

その笑みに織莉子は背筋が凍つた。

何せそれはすべてを終えて目標にたどり着き、達成した者の死に際の笑みだったからだ。

「条件は私が死ぬことです」

恐怖心も後悔の欠片も無く、当たり前のことを言つたのよつに千鶴はそう告げた。

クロードが駆け出すのを見て、^{あおこあきひ}蒼井彰は舌打ちをした。

（ヤツの狙いはおそらく双樹……。双樹がやられたらまずいー。）

彰たちの中で唯一まともに戦えるのは樽咲双樹だけだ。

双樹さえ倒してしまえばクロードは勝つたも同然なのだ。

案の定、クロードは双樹に目掛けて手刀を振り下ろしてきた。

双樹はそれを軽く避け、デザートイーグルをクロードの足に狙いを定めて発砲した。

だがそれはあらぬ方向に着弾してしまい、掠りさえしなかつた。

それを見たクロードはさらに攻撃の手数を増やしてきた。

「つー」

先ほどとは違い、攻撃が避けきれずに掠り始めた。

しかも致命傷を避けるのが精一杯で攻撃に転じることが出来なかつた。

（双樹……ー）

生傷を増やしていく双樹を見ながら彰は身体がまともに動かない己

を呪つた。

双樹は戦闘タイプの魔法少女ではあるが、能力によって他人から力を借りることで発揮する。

そのため双樹単体の戦闘能力はあまり高くない。

（俺がこんな状態でなければ……）

双樹の能力『コ・ディベンデンシー』によって肩代わりする相手のダメージは、今負っているダメージも対象となる。

彰と双樹の依存率は70%。

つまり今彰が受けているダメージの70%を肩代わりすることになってしまつのだ。

双樹は身代わりとなること自体に抵抗はない。

だがそれが出来ないのは、そうすることで引き起るある可能性に問題があった。

（俺が受けてるダメージを肩代わりしたら一発で魔文化だ……。双樹は自分が魔文化してこの状況を悪化させたくないんだ）

彰も双樹が自ら傷を負いつぶ行行為をして欲しくはない。

そういう意味では双樹を救つたことになるが、結局のところ彰たちが絶体絶命であることに変わりはない。

「！」の如くになしつ…」

一方的に双樹を攻めていたクロードに、綾女千里が飛び掛けた。

「あなたはお呼びではないですよー。」

「 も も もー。」

だが一撃当てるにも出来ず、千里はクロードに蹴り飛ばされてしまつた。

クロードが千里から再び双樹に向き直り、したとき、クロードの肩を銃弾が掠めた。

「 も もー。」

クロードがバックステップで後退する。

そして、ザート・イーグルの銃口をクロードに合わせ、鋭い眼差しで立つ双樹に改めて視線を合わせた。

「なるほど……今のは私から注意を逸らす作戦でしたか。ですが、あなたの腕では当たりませんよ」

「どうでしようかね……」

双樹が引き金を引いた。

銃弾はクロードの右太ももを掠めた。

「……？」

またしても当たった。

偶然によるものなのか。

「次は当たるわよ」

双樹が再び引き金を引いた。

それと同時にクロードは銃弾の軌道上から逸れるように横へ飛んだ。当たらないと思つてはいるが、もしもの場合に備えてそう行動した。

だがそのもじもの行為はあるで意味を成さない結果となる。

「な、なにっ！？」

真っ直ぐ進むはずの銃弾が物理法則を無視して軌道を変えてクロードに向き直つたのだ。

「！」これは……ホーミング弾！？

クロードはこれに動搖し、結果として防御が間に合わずに銃弾を右太ももに受けてしまった。

「ね？ 当たったでしょ？」

吹き飛ぶクロードに 否、その後方にいる千里に向けて双樹は笑みを浮かべた。

そのコードを一泡吹かせた攻撃を見た彰は双樹たち同様に笑みを浮かべた。

（千里に向けて能力を使つたのか！千里の千里眼と組み合わせれば追跡弾が撃てる！－）

魔法によって強化された弾丸はクロードの右足をもぎ取つた。

そのためクロードは受身を取るよりもできず、地面に呑みつけられ
た。

叩きつけられたクロードは右足を失つたとはいえ、やはりそれほどダメージは無いのかすぐに立ち上がろうとした。

だがその様子にその場に居た誰もが目を疑つた。

立ち上がりないクロードの姿に。

* * * * *

もつとも驚いたのはクロード自身だった。

普段ならどんな傷だろうと一瞬で再生できる。

なにせ自分は魔法によつて作られた人形なのだから。

それなのにもぎ取られた足は再生出来なかつた。

「「これは一体どこのことなのだ……」

思わず声に出してしまつていた。

「魔法を使った本人が居なくなつてしまえば、当然その効果も消えてしまつ。あなたが自立型の魔法生命体だつたから今は消えずにあるのだらうけど……」

彰たちでは無い、別の女の声がした。

「みくにおり美國織莉子……なぜあなたがここに？それよりも本人が居なくなつたといつのは……！」

今まで見たこと無いほどの焦りがクロードの表情を支配していた。

織莉子はそんなクロードとはまるで真逆 無表情で答えた。

「さあなやかづる鶯宮千鶴は死んだわ。私が殺したの」

その言葉を聞いた瞬間、クロードの身体は糸の切れた人形のようにながクリと崩れ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786x/>

魔法少女まどか マギカ ~眠り姫の存在証明~

2011年11月30日14時48分発行